

42059

教科書文庫

4
810.
41-1921
20000 3540Z.

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

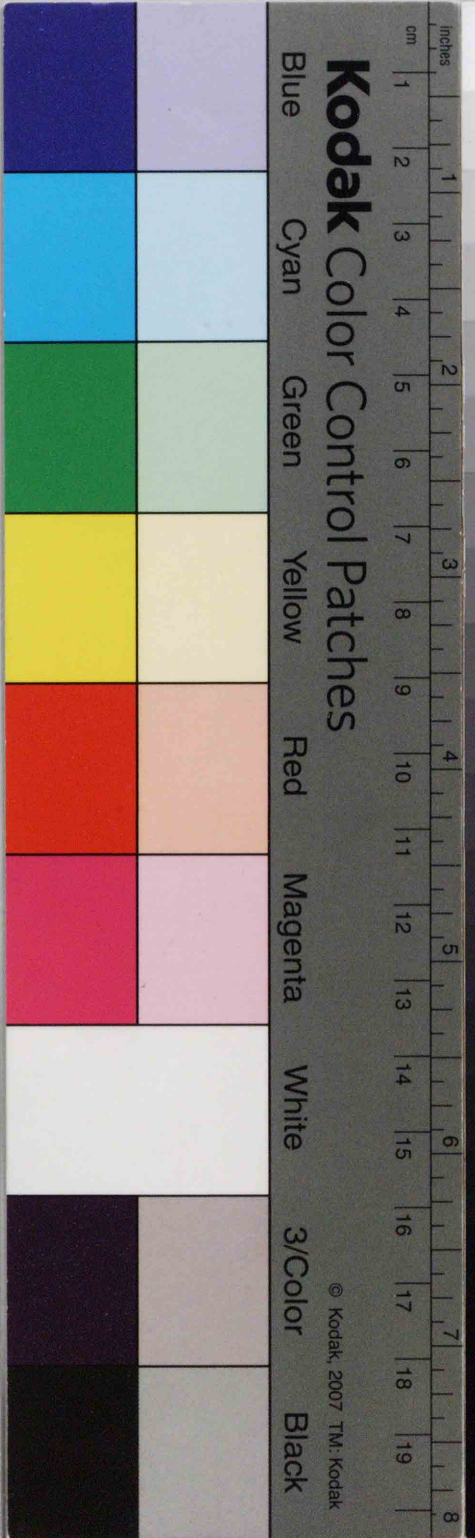


© Kodak, 2007 TM. Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM. Kodak



375.9  
Shi 13  
資料室

近世隨筆文抄





大正十四年四月四日  
文部省檢定濟  
中學國語科用

廣島高等師範  
學校教授文學士

下村熒著



# 近世隨筆文抄

東京 修文館藏版



はしがき

一、現今行はるゝ普通の讀本は近古近世文の教材に乏しくして中學を卒へ更に高等の學校に進まんとする者に最も須要なるこれ等の文章の解釋力を養ふに遺憾少からず。本書はこの缺點を補はんの目的にて編纂したるものなり。

二、材料の蒐集はこの十數年間に於ける各學校の試験問題を中心とし、前後の連絡を考慮して抄出し、その出所によりて之を統一排列したり。而して原本の時代と内容とによりて近古文三卷、近世文一卷に分てり。即ち近古の隨筆雜纂の類をはじめ戦記類、歴史類を各一卷とし、更に近世名家の文章を一冊に蒐めたり。ごなしたり。

はしがき



三、頁擔過重の評ある現今の生徒に一々辭書を引かしむる器械的の勞力を省かんが爲め、また教師板書の煩をさけんが爲に地名人名年代等はもとより難語句の頭注を多くせり。一つには生徒の記憶上にも便宜あらんと思へばなり。抑、文章の意義は單に語句の意義を個々に解し得たるのみにて、會得せらるゝものにあらず、語と語との連結、句と句との連結の上に新に生じ來るものが文章の意義なり、是れを解し得て、始めてその文章の意義を會得したりといふべし。さればこの種の解釋力を養成するところが讀書力養成上主として努むべきことにして、單に個々の語を辭書に探る爲に時を消費するが如きは寧ろ避くべきことなり。

四、本書は稿成るや教諭竜定一氏に依囑して縣立廣島中學校其の他二三校に於て、試用せしめ、更に實驗の結果を參酌して數回の訂正を加へ、今は頗る全きを覺えたるを以て、此の度始めて公刊したるものなり。

大正九年十月

編者識



近世隨筆文抄目次

一、折焚柴の記の序	.....	(新井白石)	一
二、君を諫む	.....	(同人)	四
三、淺野長政	.....	(同人)	七
四、細川幽齋	.....	(同人)	二
五、一日の澤	.....	(室鳩巢)	四
六、年にはづかし	.....	(同人)	六
七、愚公が山	.....	(同人)	三
八、老僧が接木	.....	(同人)	三
九、倭歌に感興の益あり	.....	(同人)	五
一〇、手折りし枝を慕ふ春風	.....	(同人)	三〇

目次



一一、楠正成	.....	(同人)	七
一二、壬子試筆の詞	.....	(同人)	望
一三、誠といふ説	.....	(梅園叢書)	望
一四、異見する仕方	.....	(皆川淇園)	五
一五、母の心	.....	(同人)	五
一六、芳流閣	.....	(瀧澤馬琴)	五
一七、貝原益軒	.....	(本朝傳記)	五
一八、旅行の樂	.....	(貝原益軒)	五
一九、一日も徒にすぐすべからず	.....	(同人)	六
二〇、この世の樂	.....	(同人)	六
二一、月の前	.....	(上田秋成)	六
二二、淺茅が宿	.....	(同人)	七〇

二三、重宗訴訟を聽かれし心得の事	.....	(湯淺元禎)	七
二四、清正の土腰兵糧を持たずして不興の事	.....	(同人)	七
二五、小品五章	.....		七
一、杜鵑を聞く記	.....	(瀧澤馬琴)	七
二、砧を聞く詞	.....	(清水濱臣)	七
三、袋贄	.....	(横井也有)	七
四、拂子贄	.....	(皆川淇園)	六
五、鐘馗畫贄	.....	(六樹園飯盛)	六
二六、百蟲の譜	.....	(横井也有)	九
二七、手水鉢銘	.....	(同人)	八
二八、松平定信	.....	(同人)	八
二九、花月草紙序	.....	(松平定信)	八



三〇、花のこと	.....	(同人)	六六
三一、月のこと	.....	(同人)	六六
三二、學問のこと	.....	(同人)	六九
三三、雨のこと	.....	(同人)	九二
三四、めづらしき好	.....	(同人)	九六
三五、餘地のこと	.....	(同人)	九六
三六、治療のこと	.....	(同人)	九七
三七、漁村	.....	(同人)	九七
三八、夜讀	.....	(中島廣足)	九八
三九、古戰場	.....	(井上文雄)	九八
四〇、學論	.....	(伊達千廣)	一〇一
四一、茶の道	.....	(村田春海)	一〇四

四二、知足庵記	.....	(同人)	一〇六
四三、隨時樓記	.....	(同人)	一〇七
四四、玉づさ二篇	.....		一〇九
一、小澤蘆庵主の許に	.....	(加藤千蔭)	一〇九
二、月の夜友の許に	.....	(清水濱臣)	一一〇
四五、吾學びのありしやう	.....	(本居宣長)	一一二
四六、わが教子に戒めおこやう	.....	(同人)	一一四
四七、ひとむきに偏ることの論ひ	.....	(同人)	一一五
四八、新に説を出すこと	.....	(同人)	一二七
四九、新にいひ出でたる説はとみに人のうけひかぬ事	.....	(同人)	一二八
五〇、古よりも後世の勝れる事	.....	(同人)	一三三



五一、書うつし物かく事……………(同人)……………二三

五二、手かくこと……………(同人)……………三四

五三、ふみよむ事のたとへ……………(同人)……………三五

五四、述 懷……………(同人)……………三六

目次終



近世隨筆文抄

一、折焚柴の記の序

むかし人はいふべき事あればうちいひて、そのほかはみだりに物言はず。いふべき事をも、いかにも言葉多からでその義を盡したりけり。我が父母にてありし人々もかくぞおはしける。父にておはせし人の、その年七十五になり給ひし時に、<sup>1</sup>傷寒をうれひてこと。きれ。給ひなむとするに、醫の來りて獨參湯をなむす。むべきといふなり。世のつねに人にいましめ給ひしは、<sup>2</sup>年わかき人はいかにもありなむ。齡かたぶきし身のいのちの限あることをも知らず、藥のためにいきぐるしきさまして終りぬるはわろし。<sup>2</sup>あひかまへて心せよ。

<sup>1</sup>今の勝チアス

<sup>2</sup>氣をつけて



3 文會雜記に曰く  
白石の父は土屋  
小頭なりしが大  
目付に昇りて  
才氣あり極めて  
みず此人極めて  
に痛ます云云  
者痛ます云云  
ならす云云  
母へいよ白石の  
母は一生白石の  
向いて吾夫なる  
人は一夫一妻の  
はいふことなる  
は強いたるもの  
えは壁に向て見  
を忍ぶそめて痛  
も痛むるも吾に  
めさ云云然らば  
治療せしむる

とのたまひしかば、この事いかにあらむといふ人ありしか  
と、疾病の急なるが見まらするも心苦しといふ程に、生姜  
の汁にあはせてすゝめしに、それよりいき出で給ひて、つひ  
にその病癒え給ひたりけり。後に、母にてありし人の「いかに、  
この程は人にそむきふし給ふのみにて、また物のたまふ事  
もなかりし」と、問ひ申されしに、「されば頭のいたむこと殊に  
甚だしく、我いまだ人に苦しげなる色見せし事なかりしに、  
日頃にかはれる事もありなむにはしかるべからず。又世の  
熱にをかされて言葉のあやまち多かるを見るにも、しかじ  
いふ事なからむにはと思ひしかば、さてこそありつれ」と答  
へ給ひき。これらの事にても、このつねの事ども思ひはかる  
べし。かくおはせしかば、あはれ問ひまらせばやと思ふ事

(六、神戸高商)  
4 祖父

も、いひ出でがたくして打過ぐる程に失せ給ひしかば、さて  
やみぬる事のみぞ多かる。世の常の事どもはさてもやある  
べき。おやおほちの御事詳らかならざりし事こそくやしけ  
れど、今は問ふべき人とてもなし。この事のくやしさに、我が  
子ども、亦我がごとくの事ありなむことを知りぬ。今はい  
とまある身となりぬ。心に思ひ出づる折々、過ぎにし事ども  
そこはかとなく記しおきぬ。外さまの人の見るべきものに  
もあらねば、言葉のつたなきをも事のわづらはしきをも、え  
らぶべしやは。それが中、前代<sup>5</sup>の御事におよびし事どもは、い  
ともかしこけれと世によく知れる人もなきは、おのづから  
傳ふる人のなからむもわびしからまし。我が子うまごの後  
までも、これらの事ども見むものは、おやおほちの身をおこ

5 六代將軍徳川家  
宣



6 丙申は享保元年  
なり此年五月朔  
日紀伊中納言吉  
宗入りて將軍吉  
なる因つて白石  
の職を解き間散  
の身なれり

(元、神戸商)

1 何かに腰かけて  
打刀を横に持ち  
居たりし物な  
りすべし味に  
いふは優味に  
して云ふ時指  
ふる語打刀は  
刀に對して常  
なく腰に指す  
腰刀は腰に指  
し小刀は腰に  
しる小刀は腰に

し、事もやすからず、親にてありしもの、前代の御惠をう  
けし事は世の常ならざりしことをも思ひ知ることもあり  
なむには、忠と孝との道にも違はざる事もありなましと、六  
十の老翁散位源君美、丙申の十月四日に筆を起しつ。

(新井白石、折焚柴の記)

二、君を諫む

我父致仕の後、事にふれて宣ひたりしには、蘆澤といひし  
ものは、幼き時に父におくれしを、父の遺領を給うて近く召  
仕はれしに、それより廿歳許に及びし比に、(我を召事ありて  
参りしに、戸部は物に腰掛て打刀横たへておはします。其景  
色常に變りぬと思ひしに)「近く参れ」とありしかば、腰刀をと  
りて参らんとせしに、「その儘にて参れ」とありしによりて、近

く参りしに「只今蘆澤を召し出して、手づから誅すべし。それ  
に侍ふべし」と宣ひ出したり。答へ申す事もなくてありしに、  
稍ありて「いらへ申す事もなきは、思ふ所やある」と仰られし  
ほどに、「さん候。かれが常に申し候ひしは、幼き時に父におく  
れし身の、莫大の主恩によりてかくまでは生長しぬ。此恩に  
報いまいらせん事、世のつねの人々のごとくしてはかなふ  
べからず」と申す。天性不敵なるものの、しかも年なほ若くし  
て、をこの振舞も多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候  
ひぬらん。但し、若く候時に、彼らがごとくなるものにあらず  
しては、年たけ候ひし後に、もの、用には立たぬ者多く候歟  
是等の事を存じめぐらし候につきて、御答の遅く候ひしは  
恐れ思ふ所に候」と申す。又宣ひ出す事もなく、我も又申し候



<sup>2</sup>胡頹子はケミの漢名

事もなくして侍ふほどに、やゝありて面に蚊の集りぬるに、『逐ふべし』と宣ひしほどに、顔を動しければ、血に飽て<sup>2</sup>胡頹子のごとくに成りし蚊の、六つ七つはらはらと地に落ちしを懐の紙を取出して包みて袖にして侍ふ。又やありて『罷歸りて休み候へ』と宣ひしかば、退り出づ。かの男は、常に酒を好みて、酔みだれぬる事ども有りしかば、關といひし人のそれに親しかりしをかたらひて、二人してまづ酒を断たしめて常に諫めし事共怠らず、かくて年月経し後につひに父の職を仰蒙りたりき。今は戸部もうせ給ひぬれど、はじめ我申せし詞のむなしからざるやうに仕へまゐらせよと思ふなり。』と宣ひたりき。これはかの入久しくしてまた<sup>3</sup>酗酒の事ありしが故なり。(折焚柴の記)

<sup>3</sup>酗酒はクシユ、酔狂の意

<sup>1</sup>石田三成  
増田長盛

<sup>2</sup>名護屋は肥前國松浦郡

<sup>3</sup>前田利家  
蒲生氏郷

### 三、淺野長政

文祿の初朝鮮の事おこる。同二年六月長政かの國に渡る。石田<sup>1</sup>増田等と相議し諸軍勢を率して晋州城を攻め落す。今年の冬太閤朝鮮の軍はかばかしからぬを怒つて徳川殿をはじめ宗徒の大名を<sup>2</sup>名護屋の陣に集め朝鮮の軍今のやうならんにはいつ事定るべしとも覺えず今は秀吉みづから向はんと思ふ三十萬の勢を三手に押分け利家<sup>3</sup>氏郷に大將せさせ三道より向ひ朝鮮を打破りまつすぐに大明に攻め入らん本朝の事家康さてましますせば心に懸る所なしかたか、いか、思ふと仰せある徳川殿御氣色損じて利家氏郷等に向ひ日本の大名多き中にかたがた二人選り出さ



4 黒田長政

れて一方の大將を賜はらんこと弓矢とつての面目何事か  
 これに過ぎん抑家康苟くも弓馬の家に生れ戦の中に年老  
 いぬ今この大事に及びていかで人々のあとに留つて徒ら  
 に本朝を守り候ひなん少勢には侍りとも家康も軍勢を率  
 ゐて必ず一方の先陣を承るべしかたゞの御推舉を仰ぐ  
 所に候と言ひしに彈正少弼長政進み出で暫く候徳川殿殿  
 下この年月の御振舞昔の御心とや思召す年経る狐の入り  
 替つて候を何事か宣ふべきと申しも果てぬに太閤御佩刀  
 に手をかけられやあ秀吉が心に狐の入り替つたるいはれ  
 きつと申せ申し損じなばしや首打落してくれんずと責め  
 かけ責めかけ仰せけるに彈正ちつとも騒がず長政等が如  
 きは何百人が首刎ねられんにも何條事か候べき抑この年

五畿とは、山城、  
 大和、河内、和泉、  
 攝津の五國の總稱、  
 七道とは東海、  
 東山、北陸、山陰、  
 山陽、南海、西海の  
 總稱

頃よしなき軍起して異國のみにあらず本朝にも父を討た  
 せ子を討たせ兄弟を失ひ夫に別れ妻に離れ歎き苦しむ者  
 天下に滿つ又それより兵糧の轉漕軍勢の賦役六十餘州が  
 内悉く荒野となる今日御參向あらんには五畿七道の間竊  
 盜強盜等蜂の如くに起つて安き心も候まじ徳川殿いかに  
 思ひ給ふともいかでこれを拒ぎて動なく御跡を守り給ふ  
 こと叶ふべきこれ等のことを思ひてこそ先陣とは宣ふら  
 めされば昔の御心ならんにはかほどの事など御心づきな  
 かるべきかゝる御心のつかせ給ふことこれただ事にあら  
 ず一定狐の入り替つたるには候はずや賤しき者の諺に人  
 とらんとする鼈は必ず人にとらるとはこの事にて候ぞと  
 憚る所なく申しければ太閤鼈にもせよ狐にもせよおのが



(五陸軍經理)

主と頼まんものに雑言吐く條奇怪なりと飛びかゝらんとし給ふを利家氏郷押隔て、人々御前に伺候せり長政が首を刎ねられんに御手を下さるゝまでも候はずそこまかり申せ彈正といはれて長政はさらぬ體にもてなし人々に色代して己が陣に歸り御使を待つて腹切らんとす重ねて仰せ出さるゝ旨もなし<sup>か</sup>ゝる所に肥後國に逆徒起りぬと早馬を參らす太閤大に驚き給ひ徳川殿に御使あつて長政具して御參りあれと仰せらるやがて長政召し具せらる太閤肥後國に逆徒起りぬ汝が嫡子左京大夫幸長追討の使たるべしと仰せ下さる。長政大に悦びぬ) (新井白石藩翰譜)

四、細川幽齋

1 後陽成天皇  
紀元二二六〇庚  
子二月上杉景勝  
西上を聽かず、  
家康東下し景勝  
を討たんこゝ  
時に三成傲を西  
國の諸侯に移し  
て兵を擧ぐ  
2 内大臣家康なり  
3 忠興の妻は明智  
光秀の娘なり。

4 定め命令

5 藤孝は幽齋と號す忠興の父

慶長五年の秋、奥の上杉謀叛の聞えあつて、徳川殿御發向の事あり、細川忠興御跡を慕ひて馳せ下る。この隙を窺ひて、大阪の奉行等兵を起して徳川殿を失ひまゐらせんと謀る。内府に従ひて奥に下りし大名等が妻子、一一に取つて質とせば、彼等みな御方に參らんずらんとて、まづ最初に忠興が妻子を城中に迎へんとす。かの妻、女なれど、さる者の娘なり、又日頃わが夫の心の奥は知りぬ。使者度々に及べども更にその催促に従はず、「さらばさな言はせそ。人々の見懲しのため、搦め取つて參らせよ」とて軍兵を差向く。忠興が妻、家人等に防ぎ矢射させ、家に火かけさせて自害す。奉行等案に相違し、怒なること仕出し、諸大名を内府の方人になし果てさせて詮なしとて、これより後人質とるべき沙汰に及ばず。この上は細川が城攻落せとて、丹波但馬の軍勢を差向く。  
然るべき兵をば引きすぎり、忠興具して奥へ下りぬ。おとなしき者共に、兵をば少し附けて豊後の國へ下して、杵築の城を守らせたれば、丹後には



76 刀劔  
上手

8 烏丸光廣、後に  
和歌を幽齋に學  
びて秘訣をうけ  
又書畫をよくす

藤孝入道に年老いたると幼き者共とばかり残り居て、はかなくしく軍すべ  
き者多からず。されども入道さる古兵にて少しも騒ぐ氣色もなく、宮津の  
城を棄て、田邊の城に立籠り、敵おそしと待ち居たり。  
抑、この入道と申すは弓矢打物執つて堪能なるのみにあらず、さらぬ小藝  
にだに達せずといふ事なく、天下雙なき多才多能の人なりけり。中にも敷  
島の道に深くすきて古今和歌集の秘訣悉くこの人に傳はれり。さればこの  
たびわが身討死したらん後、この道長く絶えなん事を悲しみ、城に籠れる  
初、相傳の書とも取集めて、大内に獻るとて、

古も今もかはらぬ世の中に

心の種をのこすことのは

といふ一首の歌をそへてぞ參らせける。

かくて丹波但馬の軍勢雲霞の如く押寄せ、十重二十重に取巻きて火水に  
なれと攻めけれども、入道ちつともひるまず防ぎ戦ふ。かくてはこの城な  
か、一時に攻落さるべうも見えず。烏丸右大辨勅使として大阪に向行き

9 毛利輝元、石田  
三成

10 幽齋先きに織田  
信長に屬す、そ  
の光秀に就て  
る、や京都に上  
り信長の菩提を  
吊ひ、即日薙髮  
し、十三年薙髮  
從二位法印に叙  
せらる。

11 三條西實條、日  
野光宣と共に詔  
を傳ふ。

12 下るさいふに同  
じ

13 詩經小雅北山篇  
の句、卒は循な  
り濱は涯なり普  
は偏なり即ち天  
の偏くおほき  
り地の長く敷  
るかきり天下中  
に到る處の意に  
多き土の廣く臣  
の多きといふなり

ひ、輝元、三成等に勅諭を傳へらる。「それと歌はわが國の風として、天地  
開けそめしよりこのかた、百皇の今に至るまで、その道永く傳はれり。然  
るに今、古の事をも歌の心をも知れる人忽ちに失せなん事、尤も朝家のな  
げきなり。如何にもしてかの二位法印が恙なからん様を計るべし。」と宣ら  
れたり。輝元を始として奉行等謹んで承り、急ぎ早馬を立て、寄手の軍兵  
を止む。

もとより入道は今を最期と思ひ切つて戦ひしほどに、寄手たやすう引い  
て還らん事叶ふべからず。このよし又都に聞えしかば、三條西大納言繪命<sup>11</sup>  
を含みて、丹後國に下向あつて、「速に勅に應じてその城を去るべし。」とあ  
りければ、入道畏まりて、「普天の下率士の濱王土王臣に非ずといふ事なし  
と承る。いはんやこの微賤の身、かく目のあたり寵渥の辱きを蒙るをや。  
さりながら入道が年若き時ならんには、弓矢執る身の習なり、敢へて死を  
白刃の際に決して深く恩を黄泉の下に感ずる事もありなまし。今は齡既に  
傾きぬ。たとひこの戦に死することなからんにも、餘命亦幾ばくぞや。さ



れば惜しかるまじき身なるがゆゑに、私の名譽を貪つて、いかで王命には背きまゐらすべき。」と答へ奉りて、やがて城を立つて、高野山にぞ赴きける。(藩翰譜)

五、一日の澤

冬もやうやう深くなりけるに、暮れ行く空のけしきすさまじく、雪もちらちら打散りしが、とかくする程に日もすでに暮れはてて、鳥羽玉の闇さへいと、うとまし。かくて夜も更け行くままに、夜さむ身にしみわたり、しばしもいねやらで、丑<sup>2</sup>みつばかりになりぬるに、鐘の聲も聞えず、鶏の音もせで、何となくしづかになるやうに覺えしが、いつ明くるともなく窓の白みあひける程に、家にありし童呼び起して、閨の戸あけさすれば、夜のまに雪いとおもしろう降りつみて、庭

<sup>1</sup> ねばたまの同じ、ねばたまはカラスオフギの實にて、固くして眞黒なり、故に黒夜闇等の枕詞さなす  
<sup>2</sup> 丑三、古昔の時刻の名、丑の時を四つに分ち、其第三にあたる時、更轉じて夜中、深

(四二、外語)

の草木も花咲きにはかに春來ること、ちし、四方の山の端もみな白妙になりて、人間世界さながら天上の白玉京かとあやまたるる折しも、あたりちかき池の水鳥の、聲々に鳴くもほとなければ、聞ゆ。さこそ波のうきねの寒からめと、それさへ哀を添へて、さても心あらん友もがなと人ゆかしう思ふ折ふし、いつも問ひかはす人の許よりとて、文もて來ぬ、急ぎ開きて見れば、めづらしき雪にて侍り、いかが見給ふやらん。さてはこの雪におんおきふしも覺束なく思ひ侍り、となん書きけるにつけて、かの兼好<sup>3</sup>が雪のいとおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべき事ありて文やるとして、雪の事何ともいはざりしに、この雪いか、見ると一筆いはぬとて、口惜しきことといひこしし事をふと思出で、これはあなた

<sup>3</sup> 徒然草三十一段にありをひけるなり



よりかく氣をつけていひこししを、こなたより返事なくば  
うらみやせんと思ひしまゝに、使しばし待たせて返事書き  
て、奥に、

空にふる雪はこずゑの花なれや

散るか咲くかとあやまたれける

と書いて、さて「今日はひとへにさびしく暮し侍り、思ふどち  
いひあはせてこられよかし、それこそ誠の志と思ふべけれ。」  
と、いひやりけり。かくて、やや日たくる程になりて、門をた  
く音しけり。人してあけさすれば、かの文おこせし人、例の人  
人ともなひて來にけり。形の如くあるじまうけして、翁うれ  
しく寒さわすれてにじり出で、かたみに語りあひしが、酒煖  
めて出しけるに、衆客もみな酔を勧めて清談いとこゝろよ

4 變應の用意

く見えき翁

あるじする心ばかりはこゆるぎの

いそぎありくにおとらめや君

「われらこと足たち侍らねば、御爲にさかなもとめてありく  
ことはかなひ侍らねども、心ばかりそれにもおとり候まじ  
と、されごとなどいひてほどを経けるに、衆客<sup>6</sup>けふの雪には  
翁のからうたなくてやはあるべき。」とて翁に簡<sup>6</sup>を授けしに、  
翁「いやとよむかしは雪月花の折にあへば、はや詩の思ひよ  
りも候ひしが、今は老いばれてその心も候はず。詩も久しく  
すてゝ作らねば、口澁りていひ出づべきことも覺えず。され  
ど、けふの御尋わすれがたく侍るまゝに、いかさまにも申し  
てこそ見め。」とてしばし打案じて

5 小餘綾は相摸國  
中郡磯の枕詞に  
用ふ

6 紙のなかりし時  
代に文字を書き  
し竹の札、こゝ  
にては用紙の意  
に用ひたり







むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々として  
勉めて息まざるにありぬべし。もし悠々として日を涉り、一  
旦年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひいでて、いかに悔ゆと  
も何の益かあるべき。即ち翁が身の上にて候。

もとより道<sup>4</sup>は須臾も離るべからざれば、一生の間道を行  
ふ日にあらざるはなく、あふさきさ道のある所にあらず  
るはなし然るを急迫にして求めば、たとひ僅々の得ること  
ありとも、皮膚の間にてやみなん。いかでかその肉を嚼んで  
滋味に飽くことあるべき。況や急迫なれば久しきにたへぬ  
ものぞかし。いまだ日至の時に及ばずして、やがて倦怠する  
に至りなん翁思へらく、學問は勉勵を要とす。たゞ急にして  
迫切なるを恐る。義理は涵泳を貴ぶ、緩にして懈弛なるを戒

(四二、七高)  
4 道也者不可須臾  
離也。  
可離非道也。  
(中庸)  
5 右によれば左に  
わろく長し短じ  
てなごの意、こ  
くにつけなごの  
意に用ひたり  
6 韓退之の送高閑  
上人序に夫外糞  
從業者皆不造其  
堂不嚼其肉者也

む。迫切ならず、懈弛ならず、學者進修の道において緩急相得  
て背かざるに近かるべし。(駿臺雜話)

七、愚公が山

(翁が心は知己を一世にもとむるにも候はず昔より邪僻  
妄誕にして根もなき事のさかんに世に行はれて<sup>1</sup>あなかし  
がましく聞ゆるは女郎花の一時とや申すべき大方はつゝ  
かぬものにこそ世を歴て正道へかへらぬはなし然るを心  
短くして早くその驗を見んと思ふは未練のこと、いふべ  
し)諸君列子<sup>3</sup>が書を見給へりや愚公といひし人ありけるが

(元秋田鑛山)  
1 秋の野になまめ  
きたてる女郎花  
あなかしがまし  
花もひさ時  
(古今俳諧歌)  
2 女郎花のやうに  
一時的のものに  
ある  
3 列子八篇、鄭の  
列禦寇の著、禦  
冠は老子よりや  
り遙に前に出て  
たる人らし。湯  
愚公の事は湯問  
篇にいづ



家居ちかく山のありしをいとひてわきへ移さんとして日々  
 に子供引具し出でつゝ手づから耒耜をとりて一簣づゝこ  
 ぼちとりけるを智叟といひし人を見えてかく大なる山を  
 僅なる人の力にてこぼてばとてこぼち盡さるべきかとそ  
 のおろかさを笑ひければ愚公きゝてわが代よりこぼちそ  
 めてわが子の代にも繼ぎてこぼちわが孫の代にも又その  
 子の代にも繼ぎてこぼちなば終にはわきへ移さぬ事やあ  
 るべきといへばいよく笑ひけりとなんしるしおけるも  
 とより寓言なればこの人あるにはあらねども愚公がいふ  
 やうなる事は世に愚なりといへば愚公と名づけ智叟がい  
 ふやうなる事は世に智なりといへば智叟と名づけたるな  
 らしおよそ天下の事愚公の心ならばおそくとも一度は成

4 公論百年而定丈  
 夫闔棺而事定さ  
 あるによる

5 史記に迂濶而潤  
 意於事情といへる

1 忍岡とは今の上  
 野東叡山の總名  
 なり谷中は上  
 寺の西北天王  
 寺附近

就すべし然るに世に智ありと稱する程の人は大かた智叟  
 が心にて愚公が山を移すやうの事を聞きてはその愚を笑  
 ふほどに何事もその功を成就せぬなるべし然れば世のい  
 はゆる愚は反つて智なり世のいはゆる智は反つて愚なり  
 それゆるに禦寇が世を諷してこそかくはいひつらめ今翁  
 も百年論定まるの日を身後に期し侍れば世の明智なる人  
 より見ては翁が迂濶なることを笑はるべしされど老い僻  
 めるにやあらんこの志を守りて身を終りなるところを思ひ  
 侍れ愚公が山を移すたくひなるべし。(駿臺雜話)

八、老僧が接木

1 忍が岡のあなた谷中のさとに何がしの院として一つの眞言寺あり翁いとけ

八、老僧が接木



2 徳川家光

3 がたげに

4 瑞齒萌、瑞齒の生ずる意に甚だ老いたる意にて老體を形容していふ

5 ぶあいそに

6 考もない

7 強いて

なかりし頃其の住僧をしりてしばし寺に行きつゝ木の實拾ひなどして遊  
びしが住僧かたへの人にむかひて前住の時の事をなん語りしを聞き侍りし  
に寛永のころの事になん將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時御かちにてこ  
ゝやかしこ御過ぎがてに御覽ましましけるが此の寺へも思ほえず渡御あり  
しに折節其の時の住僧はや八旬に及びて庭に出でみつはぐみつゝ手づから  
接木して居けるが御供の人々おくれ奉りて御側に二人三人つき奉りしを中  
々やんごとなき御事をば思ひよらねばそのまゝ背き居たりしを坊主なに事  
するぞと仰せられしを老僧心にあやしと思ひて<sup>4</sup>とはしたなく接木するよ  
と御いらへ申しゝかば御笑ありて老僧が年にて今接木したりとも其の木の  
大きになるまでの生命もしれがたしそれにさやうに心をつくす事ふような  
るぞと上意ありしかば老僧御身は誰人なればかく心なき事をきこゆるもの  
かなよくおもうて見給へ今此の木もつぎておきなば後住の代に至りて何  
れも大きになりぬべし然らば林もしげり寺も黒みなんと我は寺の爲を思  
てする事なりあながちに我一代に限るべき事かはといひしをきこしめして<sup>7</sup>

8 國語に魯先大夫臧文仲其身歿矣其言立於後世此之謂死而不朽也

1 李白、杜甫、共に盛唐の大詩人、楊萬里評して李詩の神、杜は詩の聖、稱し韓愈は李杜文章在、光燄万丈長さあり、白居易は中唐の大詩人毫も艱險の句を用ひず平易の旨をこせり、長慶集は彼の詩文集

老僧が申すこそ實にも理なれと御感ありけりその程に御供の人々おひくゝ  
來りつゝ御紋の御物ども多く集ひしかば老僧それに心得て大きにおそれて  
奥へにげ入りしを御召出しありて物など賜ひけりとなんいま翁も此の老僧  
が接木する如く老朽ちぬれどもある限は舊學を究めて人にも傳へ書にも  
殘して後世に至りて正學の開くる端にもなり此の道の爲に萬一の助ともな  
りなば翁死しても猶いけるが如し<sup>8</sup>古人のいはゆる死しても骨うちじといひ  
しこそ思ひあたり侍れいさゝか我が身のために謀るにあらず諸君も翁がこ  
の心を信じ給へかし。(駿臺雜話)

九、倭歌に感興の益あり

我が朝に歌あるはもろこしに詩あるが如し。よりにて詩歌とて同じやうに  
取りはやし候へども我が朝はむかしよりもろこしの文辭に疎く、李杜諸名  
家の詩をよむ人稀なり。たとひ讀みても其の旨に通じ難し。たまゝ白居易<sup>2</sup>  
易の詩和かにて倭歌の風にも適ひ平易にして通じ易きほどに是を唐詩の上



3 懷風藻は淡海三集の著、吾國詩集の權輿なり、天平勝寶三年の序あり。本朝の粹は藤原明衡の著、古來大家の漢字文を編輯したるもの十四卷

等としてこのみて長慶集をのみ學びけらし。この故に其の詩皆膚淺粗俗にして見るにたらず。懷風藻本朝文粹など考へて知り給へかし。反つて近來五山老禪の賦する絶句の體の一種澹泊の味ありて取るべきにはしかず。然れば我が朝の詩はすて論ずることなかるべし。さて倭歌に至つては我が朝の人之をもて性情を吟詠すればからやまと詞はかはれどもその所はかはるべからず。詩は一首にて詞理ともに具足して曲に人情を盡くしたればもとより三十一字の及ぶべきにあらず。翁若き時より盛唐の詩を好んで讀みて賈至が早朝大明宮の詩に「千條弱柳垂青鎖百轉流鶯遶建章劍佩聲隨玉墀

5 賈至字幼隣、唐玄宗時事へ詩をよくす。その大明宮早朝の詩は一時の名流皆之に和したる名作なり。王維字摩詰、詩に秀でて草隸に工に又畫を善くし、後人南唐の祖となす。唐開元九年の進士なり。岑參唐南賓中の進士、文に工に邊塞の作に長ず。玄宗帝の年號、文學隆盛天下の觀望されし時代なり。

歩衣冠身惹御爐香」と賦しそれを和して王維が「九天闔闔開宮殿萬國衣冠拜冕旒日色纒臨仙掌動香煙欲傍袞龍浮」と賦し岑參が「金闕曉鐘開萬戶玉階仙杖擁千官花迎劍佩星初落柳拂旌旗露未乾」と賦し杜甫が「旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高、朝罷香煙携滿袖、詩成珠玉在揮毫。」と賦するを見るに文彩の烜赫たるのみにあらず開元泰平の氣象目の中にあるが如し。かやうの所に至りて倭歌の風情は殆ど螢燭の目におけるやうに覺え侍る。たゞ

9 新古今、山邊赤人

その情に發する一ふしはおのづから詩にかなふ所ありて人心を起す益なきにあらず。國風菜菔の詩に「采采菜菔薄言采之采采菜菔薄言有之。」といふがごとし。是は婦人のおほぼこを采りて日をおくるを自ら賦したるなり。何のをかしきふしもなけれど其の時代泰平にして婦人までも無事をたのしむの情言外にあはる。それにはからずしてかなひたるは

9 も、しきの大宮人はいとまあれやさくらかさしてけふもくらしつとよめるにぞ我が朝も延喜天曆の頃の朝廷和平群臣閑暇なりし事おもひやられていと感ふかく菜菔の詩によくかなひ侍り。其の外古今集の歌は詞すなほに餘情ありて多くは一唱三歎するにたへたり。

10 も、千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく此の歌を吟すれば老人の舊を懷ふ情を感すべし。

11 (春の夜のやみはあやなし梅のはな色こそ見えぬ香やはかくる)此の歌を吟すれば有徳の拵ふべからざる誠を感すべし。

12 世の中にさらぬわかれのなくもがな千世もといのる人の子のため

11 凡河内躬恒 (四、盛岡) (二、水産) (三、米澤工)

12 在原業平



13 讀人知らず  
龍田山は大和國  
生駒郡

(四) 山口商  
14 在原業平

此の歌を吟すれば孝子の親を愛するの情を感ずべし。  
風<sup>13</sup>ふけば沖津白波たつた山夜半にや君がひとり行くらん  
此の歌を吟すれば貞婦の夫を思ふ情を感ずべし。  
14 (忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみ分けて君を見むとは)

15 古今、後撰、拾遺、後拾遺、新古今、金葉、千載、新古今をいふ

(四) 海兵  
(五) 海經  
16 那須野は下野國那須郡

此の歌を吟すれば君子故舊を忘れざる情を感ずべし。此の類外にもなほ多かるべし。古今集以後八代集に至りてはあげて數ふべからず。中に翁が常に好みて吟する歌一首あり。鎌倉三代實朝の歌に  
16 (武士の矢なみつくろふ籠手の上にあられたばしる奈須のしの原)

(三) 陸士  
(四) 女高師

此の歌を定家卿評して鬼をとり挫ぐ體といはれしとぞ。誠に勇壯をもて勝れたる歌なり。外に此の體の歌多く見え侍らす。「武士たる人常に此の歌を吟せばその金革をしきねにするの志を感じて勇氣をすゝむべきとこそ思ひ侍れ。」さて春秋のあはれをいひ月花などを詠めし歌も唯其のまゝに寫しとりてさながらみるやうにあるはなにのをかきふしもなけれどかの詞つゝきたくみによくいひかなへたと見ゆるよりは感ふかうしてすがたく覺

(四) 専檢  
17 古今集、紀友則

18 新古今藤原有家  
(三) 廣島高師

19 新古今藤原良經

(三) 千葉醫  
20 新古今源朝政

21 金葉、源經信

22 新古今藤原顯輔

23 新古今西行法師

24 新古今藤原定家  
佐野は紀伊國東牟婁

25 無住法師の沙石  
集にいづ

26 徒然草十四段に  
よれり

え侍る今思ひ出したる數首をもて例していは

17 [久方のひかりのとけき春の日にしづ心なくはなのちるらん]

18 [朝日かげにはへる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとぞみる]

19 [うちしめりあやめぞかをる郭公鳴くやさつきの雨のゆふぐれ]

20 [庭の面はまだかはかぬに夕立の空さりげなく出づる月かな]

21 [夕されば門田のいなばおとづれてあしのまろやにあき風ぞ吹く]

22 [秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月の影のさやけさ]

23 [津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり]

24 [駒とめて袖打はらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮]

是等の歌不盡の景氣をうつしてさながら目に見るがごとく覺え侍り。折にふれて是を吟詠せば襟懷を清くし塵想も遣りぬべし。西行が<sup>25</sup>佛法は倭歌によりてすゝむ」といひしさもありなんかし。わがともがらも吟詠をたすけ性情を養ふにはたよりなきにあらず。されば倭歌のすてがたきはこゝにあるべし) 但し此<sup>26</sup>ころの歌は新しくいひいでゝ一ふしをかしくきこゆるはあ



れどこと葉の外にけしき覺えてあはれふかきはなし。いかでか人の心を感じ興するの益あるべき。是も晩唐以後の詩のごとく詞にのみもとめて情に本づくといふ事をしらぬなるべし。何事も風俗の衰へゆくまゝに浮靡にながれて實をとり失ひぬるこそなげかしき事なれ。詩歌のみに限るべからず。

(駿臺雜話)

### 一〇、手折りし枝を慕ふ春風

(盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志をかへぬは、是又士の常なり。もし時の模様によりて覺悟を變じ、世話にいふ<sup>1</sup>えりもとにつくやうにては、何をもて士と申し侍るべき。

水邊楊柳綠煙絲 立馬煩君折一枝

唯有春風最相惜 慇懃更向手中吹

これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。此の三四の句意婉にしておもしろく覺え侍る。よりて其の意を翁がよめる歌に、

(四、八高)

<sup>1</sup>權勢富貴に媚附するこゝに懷の温かなるにつく

<sup>2</sup>楊巨源字は景山中唐の詩人この詩は全唐詩第五函の楊巨源集にいづ

なれてふく名殘やをしき青柳の

手折りし枝をしたふ春かぜ

楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほ其の手折りし手を去りやらで、をしみがほに吹くこそ、いとやさしく覺え侍る。古より忠臣義士の、盛衰存亡をもて心をかへぬにたとへつべく候。

翁むかし源平盛衰記をよみて、源氏の士には渡部瀧口競、平家の士には彌平兵衛宗清が事を感じしが、又東鑑にて伊東九郎祐清が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を撰り置きしが、いまだ稿を脱せざるうちに、池魚の災にかゝり、其の後ふた、び草を起すこともなく、打過ぎし程に、今は其の文を

<sup>3</sup>源平盛衰記四十卷は平家繁昌の事に始りて女院六道廻り物語に至る  
<sup>4</sup>東鑑五十二卷は高倉天皇治承四年頼朝伊豆に起りし朝藤原頼朝實朝宗尊親王を經て宗尊親王に至るまで鎌倉の將軍六代の間の事な記す  
<sup>5</sup>火災の義、風俗に通に俗云城門失火、殃及池魚、舊

一〇、手折りし枝を慕ふ春風



説宋城門失火、  
而空竭池魚也、  
あり

(三、高師)

6 後白河帝の皇子  
幼にして聰慧人  
夙に望み、  
平等院の殿に流  
矢に申りて、  
御年三十

ば跡もなく忘れ侍る。

〔渡部競は源三位入道頼政が所従の士には第一の者なり。然るに治承年中、頼政、高倉宮をすゝめて兵を起せし時、急に京師を發して、倉皇として三井寺へ赴きしが、打忘れてやありけん、競に斯くと知らせざりし程に、競しばらく猶豫して家にありしを平宗盛聞きて、日ごろ競が魁偉なるを見て、己が所従にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば請ふべきやうもなかりしに、この度競ひとり都に残りしと聞きて、六波羅に參れ。』と人していはせければ、參りけり。宗盛對面して、  
「汝今より我につかへば、入道の恩にはまさるべし。」とて、小槽毛といふ馬に具鞍おき、乗替の料とて遠山といふ馬を引きそへ、黒糸緘の鎧かぶとまで皆具してたびけり。競かしこま

7 世と共に推移し  
て其折々の流行  
便宜に就くべし  
の意  
8 さよは只よさい  
ふ程の意

9 六波羅は洛東に  
ありし所  
て宗盛等の邸第

り賜はりて、ほくそ笑ひして罷り歸りぬ。一族家人打寄りて、  
「入道殿、是程の大事を思ひ立ち給ふに、ひとり取殘されしは、眞實に遺恨なり。大將の斯くうちたへ語らひ給ふはいなみがたし。』時の花をかざしにせよ。』といふ事もあれば、たゞ此の儘にてあれかし。』といふを、競、いやとよ、勇士の義さはあらず。』とて、宗盛よりたびける鎧着て、小槽毛に乗り、郎黨七騎打連れて、三井寺へと打出でしが、六波羅の門前を通りし時、馬にのりながら、門の内をのぞきつゝ、高聲にいひ入れけるは、競こそ只今下し賜はりし馬にのり、三井寺へ罷り越し候。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れがたく候へば、この度死をともし致すにて候。御門前を空しく打過ぎんは、ほいな。候へば、御暇を申し候。』とて三井寺にいたり、頼政と一所に



10 山城國守治郡

11 刑部卿忠盛の五子にして清盛の異母弟

なりしが、其の後宇治橋の合戦に、潔く討死してけり。

彌平兵衛宗清は平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に囚はれしを、頼盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。其の時宗清頼朝を朝夕にいたはりしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して疎意なきよしをいはせける程に、頼盛ひとり一門に叛きて都にとまりけり。其の後平家いまだ亡びずして西海にありし時、頼朝舊恩を謝せんために頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召し具せらるべき由をいひおこされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に、「いざ、つれて下らん」といひしに、宗清いひけるは、頼朝某に下れと候は、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてある

12 領地、贈物

べく候今更源氏に詔ひて、其の蔭により候はんは、西海にある朋友どもの承る所も、口惜しうこそ候へ。君はかくて都に御安堵しおはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜安き御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るも、痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、頼朝某が事を尋ねられ候は、折ふし勞ることある由を仰せられて給はり候へ」とて鎌倉へは行かざりけり。其の後西海へ下りけるにや、其の終を知らず。

13 この一段の事は東鑑卷一巻二等に見ゆ

14 禁中守護

13 伊東祐清は伊東祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫の時、祐親に依りておはせしが、祐親禁衛の役に當りて京師に赴きし間に、頼朝よからぬ事あり祐親満期に至りて京師より歸りし後、之を聞きて大いに怒り、頼朝を害せんとするを、祐



15 石橋山は相模の小田原町附近にあり

16 賞典

17 壽永二年木曾義仲、平通盛を加賀國江沼郡篠原に破れり

清悲しみて頼朝を愛護し、潜かに遁れ去らしむ。其の後頼朝兵を起して伊豆より相模へ赴きし時、祐親平家の味方として、大庭景親等と石橋山<sup>15</sup>に至りて、頼朝を襲ひけり。其の後頼朝東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕りて到りしを、其罪を決するまで、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清を召し出して、<sup>16</sup>勸賞を行はれんとありしに、祐清たゞ御恩に早く殺され候へ。父囚はれ、其の子勸賞せらるゝ法や候。もし我を殺し給はずば、平家に歸すべし。といふに、さればとて、我を救ひし者を殺すべきやうなし。とて、ゆるして放ちやりけり。祐清それよりすぐに京師に奔りて平家に屬し、後<sup>17</sup>篠原の合戦に遂に討死せり。この三人、時代も大かた同じく、志節も相似たり、その清風高義、源平の間

(四、專檢)

1 太平記卷十三、龍馬進奏の事の條に見ゆ  
2 東詩經に鳳鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽、朝陽、山東、唐書、韓瑗傳、韓瑗、內、外、以、言、為、諫、將、宮、御、史、李、善、感、奉、天、喜、上、疏、極、言、時、人、喜、之、謂、為、鳳、鳴、朝、陽

に求むるに、其の類すくなく覺え侍る。(駿臺雜話)

一一、楠 正 成

(建武中興の人物にては、<sup>1</sup>縉紳家に藤藤房、<sup>2</sup>鈴家に楠正成もとより輿論の歸する所にて候も、しその人品をいはば藤房は公卿輔弼の臣たり、正成は將帥禦侮の臣たり、もしその材の大小をいはば、正成の材、藤房の及ぶ所にあらず、<sup>1</sup>藤房龍馬の諫は直言の極、朝廷を聳動す誠に、<sup>2</sup>朝陽の鳳鳴といふべし、然れども、正成恢復の功とは、竝べ論じ難し、その上藤房は一諫の後國をさり世をのがれしが、正成はその身國難に死するのみにあらず、忠義代々家に傳へ天下にあらはる當時誰か正成に比する人あるべき、但し正成も外の言行世に傳



楠正成一卷書と  
いふものあり、  
山鹿素行の序を  
附す。又楠家傳  
七卷書といふも  
のあり

三代は正成・正  
行・正儀。

はらざればその人となり委しきことは知れ侍らず世に楠家の遺書とてきれきれ流布するものあれど多くは後人の偽作と見え侍り然れどもそのしるき事は争亂の初一城をもて天下を引受けて始終少しも挫屈せざるにてその材量の逞しきを思ひはかるべし殊に仰慕すべきは天下一盛一衰の間名將勇士といへども時勢に附いて反側を常とし朝夕を保たざる中にひとり楠家のみ子孫累葉かたく遺訓を守り一門闔族心を一にし力を戮せ各身をもて國に報い三代の間一人も二心あることを聞かず古今比類なかるべし正成徳澤深厚にして長く人心を結ぶ事なからんにはいかでかかくの如くなるべき

然るに世の尙論する人推尊んで諸葛孔明に比するは兩

5 正成は涿川に  
子正行は四條  
に同じく國難  
殉す。孔明また  
自ら五丈原に  
子瞻は綿竹に  
に國家に殉せし  
をいふ

(三六、外語)  
(四、海機)

6 關趙は關羽、趙雲  
7 伊は姓、尹は名、  
殷湯王を相けて  
天下に王たらし  
めし人  
8 山城國相樂郡

人いづれも兵略をつとめ興復を謀り父子國事に死するも同じければなりそれはさる事なれども孔明は臥龍なり道徳を懷抱し功名を遺外し草廬にて一生を終へんとせしにはからざるに蜀の先主の三顧に遇ひて己むを得ずして出で仕へしが一朝關趙が上に立ちて君臣魚水のごとくなりさればその出處伊尹呂望に近しとなん古人の論もあるぞかし正成はもと功名科中の人なり後醍醐帝笠置に臨幸の時近國の名士を徵されし間正成も召に應じて参じけりこれその出處孔明とは大に異なる上恢復の後も尊氏義貞の下に列して専らに任用せらるる事を聞かず孔明をもて擬せば恐らくはその論にあらじその兵を用ゐるも孔明は正大にして奇計を用ゐる節制の兵といふべし翁かねて論ず



9 史記淮陰侯傳に  
いづ

10 太平記卷三に委  
し

11 史記の外十八大  
史略漢高祖記に  
いづ、背水陣は  
井徑口の戦、且は  
は灘水に龍且は  
戦ひし時の事  
12 この事さも太平  
記の事さも太平  
べし

らく正成が敵を料り兵を用ゐるは韓信に似たり韓信楚に  
寄食する時より既に項王の制し易きを知り正成河内に家  
居する時より既に鎌倉の弱め易きを知るよりて韓信高祖  
を見て盛に項王の勇を稱してその勇は恐るるに足らざる  
事をいひ正成後醍醐帝に謁して盛に鎌倉の強きを稱して  
その強きは恃むに足らざる事をいふその後兩人共に多く  
は籌策を用ゐて勝を取りし事掌握にあるが如し韓信は囊<sup>11</sup>  
沙背水敵を破り正成は釣屏木偶敵を鑿にするを見給へ兩  
人の兵を用ゐること一轍に出でざるかはいづれも堅きを  
擢き鋭きを拉ぐといへど韓信が材は敏速に長じてよく攻  
む未その守るを聞かず正成が材は持重に堪へてよく守る  
未その攻むるを見ず韓信に城を守らしめばよく正成が如

13 賈誼の過秦論に  
見ゆ

14 功績を致す心

15 河内國南河内郡  
葛城山の一峰

16 孫武は齊人、吳  
起は衛人、共に  
兵法を以てあら  
はる

17 令せ祭る

くならんか正成に敵を攻めしめばよく韓信が如くならん  
か古人も攻守勢殊也といへば如何あるべき翁がいまだ決<sup>13</sup>  
せざる所なりしかいへど韓信が兵は利欲の私に出でて一  
身のためにし正成が兵は忠義の心に出でて國家のため  
すその底績の心おのづから同じからず昔河内の人の語り<sup>14</sup>  
しとて或人翁にいひしは金剛山のあたり<sup>15</sup>に南北の明神と  
號する社ありその中座を正成とす左右は孫子吳子なり正<sup>16</sup>  
成常にわれ天下に武功を立つることは孫吳のかげなりと  
いひしによりて之を祔祭する<sup>17</sup>とぞこれにて今に正成が遺  
愛の民にある事を知るべし但正成かくの如く絶倫の材を  
もて聖賢の道を學ばずして孫吳が術をのみ崇びしは遺恨  
といふべし。(駿臺雜話)



〔三、高師〕

〔四、海機〕

1 史記に丹砂可化  
為黃金、黃金成  
以爲飲食、器則益  
壽、神あり、金丹  
神術の術をいふ、  
壽の術をいふ、長

2 漢書董仲舒傳に  
下帷發憤讀書、  
三年不窺園、  
るによる。

〔三六、水産〕

3 二程即ち明道、  
伊川の兄弟と共  
に孔子の學を祖  
述したり、魯は  
孔子の生誕の地  
をかくいふ、  
風

一二、壬子試筆の詞

〔日月迭に移つて、白駒の隙過ぎやすく、衰病日に侵して、<sup>1</sup>黃金の術成りがたし。されば犬馬のよはひ是まであるべしとも思はざりしが、いつしか老の波より來て、ことしは七十あまり五つの春にもなりぬ。あまつさへ近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝ、昔の董生<sup>2</sup>を學ぶどにはあらねども、此の三とせ春の園を窺ふ事も叶はねば、園の中ながら梢につたふ鶯の音に殘の夢をさまし、枕にかをる梅が香に過ぎしむかしをしのぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若かりし時より、學びの窓に年を経たる甲斐ありて、程朱の道にしたがひて、鄒魯<sup>4</sup>の風をたづね

5 韓退之、歐陽修  
唐宋八大家の一  
都人行き、  
6 田舎人の歩  
き方を學び、  
その歩むるに  
得ずとも、  
方寸を忘れたり  
り、已むるに  
捨て、己の行  
がに失ふ者、  
茲に文意を  
べり、  
不聞、  
之、  
未得、  
其、  
而、  
三、  
夫、  
禮、  
夫、  
經、  
夫、  
常、  
友、  
典、  
者、  
人、  
8 蠶信也、  
白虎通、  
謂、  
力、  
最

韓歐が文をこのみて、<sup>6</sup>邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべき。さて多くの年月を経て、世の移りかはる有様を考ふるに、盛衰榮枯互に行きかふをば、夢とやいはん現とやいはん。誠に、富貴は浮べる雲のごとく、禍福は糾へる繩のごとし。といへるが違ふ事あるべき。中に只吾が聖人の樹て給へる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、是ばかりはかはることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきは此の道ぞかし。然れども儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく、利欲にさとなる程に、五常の道廢れて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。もとよりいやしき身にて、一代の風教を維持せんとすともわが力に及ぶべきにあらねば、ひとへに蚍蜉の樹を撼かし、<sup>9</sup>精衛が海を填むに似たる



13 前代の徳を修め  
 12 昔の春ならぬわ  
 11 公孫務正學以言  
 10 關齋仁齋徂徠著  
 9 詩笑不覺大樹  
 8 企て徒勞する  
 7 名曰精衛是炎帝  
 6 海潮而不取西海  
 5 之木石以填東海  
 4 故精衛取石以填東海  
 3 名曰精衛是炎帝  
 2 企て徒勞する  
 1 詩笑不覺大樹

べし。さはいへど、世を憂へ民を新にするも、吾が儒分内の事  
 なれば、是を度外に置くべきにも非ず。いかなれば世に老師<sup>10</sup>  
 宿儒と稱する人の、好んで異説を肆にし、又は他道を雜へて、  
 仁義五常の沙汰をばよそにするぞ。たゞ務めて新奇を競う  
 て、俗耳を悦ばしめ、時好<sup>11</sup>に投ずるなるべし。いと口惜しき事  
 なり、古人のいはゆる阿世曲學とは是等をいふなるべし。よ  
 し人はさもあらばあれ、縦ひ風俗は昔にあらざるなりぬとも、  
 わが身ひとつはもとのごとく仁義の道を守りつゝ、前脩の<sup>12</sup>  
 模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりししともい  
 ふべけれ。しかるにあら玉の春の初として、人は皆己が志身の  
 福を萬代といはふ中に、我はたゞ五常の道に心をよせて、い  
 つもかはらず目出たきものは此の道なりとて、かくなん筆

をこゝろむるならし。

此の春もかはらでゆかん七十に

あまる五つの道をたづねて (駿臺雜話)

一三、誠といふ説

(三、小樽商)

(一勺の水を海に入れて、海の水増したりといはむは愚な  
 り。まさずといふは妄なり。水をくはふる所は我にして、増す  
 と増さざるとは、我にあらず。我にあらざるものは、しひて其  
 辨を求めずして可なり。我に在る處のまことをつくす。是君  
 子の道なり。誠とは、偽をいはざる事とのみ心得たらむは愚  
 なる事なり。ある人、司馬溫公に、誠に入る法を問ひければ、妄  
 語せざるより入るとぞ。實に、妄に語らず、偽をいはぬより、誠

1 溫公の傳に見ゆ



の道には入るなれども、虚言をいはぬを誠とはいはぬなり。いつはりをいはぬに對する信は小し。偽なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は、至りて小きものなり。地におとせば目にもかゝらぬ様なれども、内に一の誠といふものありて、奪ふべからず、隠すべからず、味すべからず、覆ふべからず。その時至るに及びては、芽を出し葉を生じ、花を開き實を結ぶ。その子を水に腐し、火にやきて芽を出さずといふは、その子の尤ならむや。是によりて物の子を實といふは、實は則ち誠なり。一つも誠ならざる者ありて、腐れたるものは生ぜず。痛みたるは苗弱し。人の誠も尙かくの如し。昔、衛の靈公と云ひし君、夜、夫人南子と共に、坐し給ひけるに、遙に、車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて、又鳴りけり。靈

<sup>2</sup>小學又は戰國策等に見ゆ

〔三、專横〕

公、誰なるべきかと、南子にとひ給ひければ、是は蘧伯玉なるべし。禮に、下、公門、式路馬といふ事あり。忠臣と孝子とは不爲昭々、信、節、不爲冥々、情、行といへり。蘧伯玉は衛の賢人なり。夜なればとて禮を廢せじ。と云ひけり。靈公、人を使はして、見しめけるに、果して伯玉にてぞありける。人しるまじとて、欺くは妄なり。四知といひて、人しらずと思ひても、天しる、地しる、神しる、我知る。いかでかおほひかくすべき。たとへば、一升の米、日々に二三十粒をとらむとも、措むとも、しれざるべし。然れども、久くして、おく時はまし、とる時はへる。草木も、朝見し、いろも、暮見し、色も、きのふみしも、けふみしも、さしてかはらぬやうなれども、誠といふもの、すこしの間斷なき故に、いつ太るともなけれども、次第に、ふとるものなり。人のみぬ間と

<sup>3</sup>後漢書揚震傳に出つ

〔四、東北農〕



4 箬は矢の一端の弦にはめる部。

5 (四、海兵) 蜘蛛の巣。

6 人之視己如見其肺肝然則何益矣 (大學)

7 後撰和歌集伊勢

て、間斷あらば、草木もおもふままにはのびもすまじ。深き谷の蘭も、遙なる山の紅葉も、人なしごとにもよく薰り、うつくしく照ればこそ、人至りたるごきも、香きよく、色麗はしけれ。人の至るを待ちて香をはなち、色を出さむごせば、箬<sup>4</sup>にあふ事あるべからず。常々、心にかけて、掃灑したらむ座席と、俄に蜘蛛<sup>5</sup>のいごり、柱ふきたらむごは、いかでか見まがふべき。人、平生をたしなますして、その期に臨み、偽に文らむは、誠の俄掃除なるべし。如<sup>6</sup>見其肺肝<sup>6</sup>ごて人を欺くべからず。我心を欺くな<sup>り</sup>。

7 なき名ぞと、人にはいひて、やみなまし

こゝろのとはば、いかがこたへむ。

この歌の如く、人をば欺くべけれごも、心に顧みて、なごて

8 誓の證支

今の如く、誠ならざる事をばいひしぞ、人をば欺くごもいかで自の心をば欺くべきぞご、咎めたらむには、自ら耻づかしくなり、ひごり居ても額より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙りし時、偽なき旨を、起請を以て申し上ぐべし。ご有りければ、我、一生、偽をいひし事なし偽なしと申す上は、此事に限りて、起請をばかくまじとて、終に書かざりしこそ、勝れていみじくきこゆれ。人は我意の有るものゆゑに、一且、我がいひ出だしし詞は、たごひ悪しと案じ當りても、是非に云ひ募りて、我を立つるものなり。是れ朽ちたる實の如し。實といふものをうしなひたるなり。常式<sup>8</sup>の者。この意あれば、人に憎み疎んぜられ、人の主人となり、奉行頭人なんご、この意あれば、人をやぶり國をそこなふ。北條泰時、政をしられけ



9 政治をするこゝ  
裁判をするこゝ

る時下總の國のある地頭、領家の代官と爭論あり。對決に及ぶとき、領家尤もなる道理申し立てけるとき、地頭、手をはたとうち、泰時のかたにむかひ、あら、まけや」といひければ、並み居ける人々一同に笑ひける。泰時うちききて、いみじくも負けけるものかな。某代官として、久しく成敗しつれども、かか事うけたまはらず。あはれ、まけぬるときこゆる人も、適はぬ迄も陳ずる習ひなるに、前の一通、さもと聞ゆる所、領家の御代官申さるる所、肝心ときこゆるに付き、何事なくまけ給へる事、返すがへすもいみじく聞え侍り。正直の人にて御座しけり」とて、打ち涙ぐみ感じ申されければ、始めわらひつる人々は、にがりきりてぞ見えける。是によりて、訴訟殊更の儼事もなかりけるにこそとて、まけ様を感じ、六年の未進の物、

三年迄ゆるしけり。たとひ訴訟まけになり、いかなる事にあはむとも、いつはりはいふべからずと、わが心を欺かぬ誠ゆる、人もかくは感ぜしなり。(梅園叢書)

一四、異見する仕方

(四、水産)

(淀川にて鯉を取るに漁夫水中に入りて鯉とならび居て脇へかかへこみて浮び出づるを抱鯉と云ふ近きころよりのことなりとぞ人を諫むるの道も是に同じはじめは一人のおしきことと共にならび居て折よきところにて善におもむかすること肝要たるべし人を異見するにも大かたの人はその者の非なることを舉げて異見すいよく容れざるなりまづその人の功を舉げて是を賞美しかかる功をなしながらいかでかさるよろしからざることにおもむくやよろす任すべき人がらなるをただよろしからざるの志よりして今までの大功を失へりその善に歸すべしとあらばおのれを慢せざるの人なければかならずその理に伏すべし)(昔川淇園、雲萍雜誌)



一五、母の心

(三、東高商)  
1 出舟の用意をす  
る事  
こゝは舟を操り  
て居る事にいへ  
るなるべし

(伊勢の浦にてあまの鮑とるには乳のみ子なんと引きつれて夫は權をつかひ居て舟もやひするに妻は海底に飛び入りこゝかしこ貝を求むるうちに子の乳を尋ねてよゝと泣く聲の海底に聞ゆるにぞ今ひとつ得たく思へど子の泣く聲の聞ゆるにひかされて浮びいで舟ばりに取りつき息もつきあへず子に乳をそふるその有様哀にして實に惻隱の心も發動すべし) (雲萍雜話)

一六、芳流閣

1 變化常なく福さ  
思ひし事も福さ  
なり福さなるこ  
事も福さなるこ  
こ、文選に夫福  
之、與、福、何、異、糾  
纏也、また老糾  
今福分福所倚福  
極あり

古の人謂はずや禍福は糾ふ繩の如し一人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなしこは福の倚る所はた禍の伏す所彼にあれば此にありとは思へども豫てより誰かよくその極を知らん憐むべし犬塚信乃は親の遺言記念の名刀心にしめつ身につけつ艱苦の中に年を経て得難き時を得てしかばはるく古河へ齎して名を揚げ家を興すべかりしその福は禍とふりかはりたる村雨の及は故の物ならでわが身を劈く響とぞなりし憾をこゝに釋く由もなく緯

急にして意外にあり僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに夥多の圍をきり開きて芳流閣の屋の上に登れども左右に脱れ去るべき道のなければ其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけん想ひやるだにいと痛まし

されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして月來獄舎に繋がれし禍は今恩赦の福我が縛の索解けて人にぞかゝる捕手の役義犬塚信乃を搦めよとて愁に擇み出されつ他の憂を身の面目に今更用ひられん事願はしからずと思へども辭みて許さるべくもあらぬ君命重く彌高き彼の樓閣は三層なりその二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば足下遠く雲近く照る日烈しく堪へ難き時は六月二十一日昨日も今日も乾蒸の焰熱を渡る敷瓦は凸凹隙なく波濤に似て下には大河滔々たるこ、生死の海に朝る流は名に負ふ阪東太郎水際の小舟楫を絶え進退既に谷りし敵にしあればいかでわれ繋ぎ留めんと颯の樹傳ふ如くさらりと登り果てたる三層の屋根には目柴さすよしもなくかたみに隙を窺ひつ、疾視へあうて立つたる有様浮圖の上なる窟の巢を巨蛇の狙ふに似たりけり。

2 獵夫の鳥獸を射  
る時に身を隠す  
爲に用ふる柴等  
をいふ  
3 寺塔



4 足利氏

廣庭には成<sup>4</sup>氏朝臣横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし牀几に尻をうち掛け  
て勝負いかにと見上げたり亦閣の東西には腹巻したる許多の士卒槍長刀を  
晃かし或は箭を負ひ弓杖突きたて組んで落ちなば繋ぎ留めんと項をそらし  
てこれを觀る加之外のかたは連綿として沓なる河水遶りて砌を浸せばたと  
ひ信乃武事長け脅力衰へすよく見八に捷ちたりとも<sup>5</sup>墨氏が飛鳶を借らざれ  
ば虚空を翔るべくもあらず魯般が雲梯なければ地上に下るべくもあらず渠  
鳥ならずも羅に入りぬ獸ならずも狩場に在り三寸息絶ゆれば絆みな休まん  
脱れ果てじと見えたりけり

<sup>5</sup>列子湯問篇に斑  
輪之雲梯墨翟之  
飛鳥自謂能之極  
也也<sup>6</sup>斑輪は魯  
般なり

其時信乃思ふや「初層二層の屋の上までおひ登らんとせし兵等を斫り落  
しつる後は絶えて近づくものなきに今たゞひとり登り來ぬるはよに覺ある  
力士ならんしやつはこれ膳臣巴提使が虎を暴にする勇あるか又富田三郎が  
鹿の角を裂きたる力あるか遮莫一箇の敵なり引組んで刺しちがへ死するに  
難きことやあるよき敵ござんなれ目に物見せん」と血刀を袴の稜もておし拭  
ひ高瀬の如き方桴に立つたるまゝに寄するを俟てば見八も亦思ふや「かの

<sup>6</sup>昔捕史の携帶せ  
し具、短き鐵棒  
の中程に鈎あり  
て犯罪者を捕ふ  
る時これにて打  
撃したり

犬塚が武藝勇悍素より萬夫不當の敵なりさりとても搦めかねて他の援を借  
ることあらば獄舎の中よりこの役義に擇み出されしかひもなし搦め捕ると  
も撃たるとも勝負を一時に決せんものを」と思ひにければちつとも擬議せず  
「御誼ざふ」と呼びかけて拿つたる<sup>6</sup>十手を閃かし飛ぶが如くに方桴の左の方よ  
り進み登りて組まんとすれど寄せ附けず「心得たり」と鋭き太刀風に撃つをは  
つしと受留めて拂へば透かさずこむ刀尖を支へて流す一上一下二る薨を踏  
みとめてしきりに進む捕手の秘術あなたも劣らぬ手練の働岌より落す太刀  
筋をあちこち外す虚々實々未だ勝負を判かざれば廣庭なる主從士卒は手に  
汗握らざるものなく瞬きもせず氣を籠めて見るめもいとゞはるかなり  
さる程に犬塚信乃は悔りがたき見八が武藝に敵を得たりけりと思へば勇  
氣いやまして刀尖より火出づるまで寄せては返す太刀音かけ聲兩虎深山に  
挑むとき鏗然として風起り二龍青潭に戦ふ時沛然として雲起るもかくぞあ  
るべき春ならば峯の霞か夏ならば夕の虹かと見るばかりなると高き閣の  
棟にして死を争ひし爲體よに未曾有の晴業なれば見八が被籠の鎖肱當の端



(四、米澤工)

を裏かくまでに切裂かれしかど太刀を抜かず信乃は刀の刃もつゝかで初に淺痕を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども足場を守りて撓まず去らず疊みかけて撃つ太刀を見八右手にうけ流してかへす拳につけ入りつゝやつとかけたる聲と共に眉間を望みて磔と打つ十手を丁とうけ留むる信乃が及は鏝際より折れて遙に飛びうせつ見八得たりとひき組むをそがまゝ左手に引著けてかたみに利腕しかと取り振ち倒さんと曳聲合して揉みつ揉まるゝ力足これから齊しく踏み込らして河邊の方へころ／＼と身を軋ばせし覆車の米苞阪より落すに異ならず勾配けはしき棧閣に削り成したる薨の勢とゞまるべくもあらざめれどかたみに拿つたる拳を緩めず(幾十尋なる屋の上より末遙なる河水の底には入らで程もよし水際に繋げる小舟の中へうち累なりつゝ、どうと落つれば傾く舷と立つ浪にざんぶと音す水煙纏ちやうとはり切つて射る矢の如き早河の真中へ吐き出されつしかも追風とひく潮に誘ふ水なる下り舟往方も知らずなりにけり)(瀧澤馬琴 南總里見八犬傳)

一七、 貝原益軒

(三、長崎商)

(貝原益軒嘗て、湊川を過ぎて楠公の昔を追想し、公の傳記の梗概を片石にしるし、遺蹟を永く存せむとて、兵庫の富商にはかりしに、大に賛しければ、碑文を撰びて與へたり。こゝに富商はうち喜びて、石工にも謀りてありしに益軒、俄にその文稿を取りにおこせたり。文章の改削にもやこ、そをかへししにやがてまたいひ送りけるやう余思ふに、楠公の勳功日月にもくらぶべきに、余のごとき淺學の筆もて碑文を記さむは踰等なれば、この事は思ひ止みぬ。竊忽なることを約せし罪は、許したまへといふ。益軒の篤實にして、謙遜なりしこと、この一事を以ても知らるべきなり。

益軒、姓は貝原、名は篤信、通稱を久兵衛といへり。筑前の藩醫寬齋の子なり。幼より群兒のなす遊を好まず、ひたすら讀



1 陸象山、王陽明  
2 朱熹の學問

書を嗜みぬ。中年におよびて京都に講學し、後醫とならむ志をおこせり。初め<sup>1</sup>陸王二氏の説を喜びしが、後<sup>2</sup>朱學に歸したり。心術をもて、後世に裨益せむと欲し、いささかも名利に馳せず。故を以て、著書數百部、假字がきのもの多し。見識、人の及ばざるところなり。益軒、子なし、兄存齋の子を嗣となす。正徳四年、享年八十五にて卒しぬ。益軒、令聞一世に高かりしかと常に恭謙にして身の及ばざることをおそれ、吾無<sup>3</sup>長人者、唯恭默思道而已といへり。嘗て、海路より筑前へ歸る時、同船せる數輩思ふがままに語りて日を過ししに、一人の少年あり、傍に人なきがごとく、揚揚、經義を講説してやまず。益軒は恭默座隅に居てこれを聽き、更に一言をも出ださず。客船湊につきける時、各その姓名、郷貫を告げしに、かの少年、貝原久兵

3 原籍

衛と各乘れるを聞き、大に慚愧して、その名をいはずしていづこともなく遁げ去れりとぞ。

益軒、儒學の外に殖産興業の事にも志あつく、農耕本草の著書もまた少なからず。詩をば無用の閑語なりとして賦せざりしが、歌は折にふれて詠み出でたり。文章も字を鍊り、句を構ふるは儒者の文にあらずとて、辭の達するを以て主とせり。その卒せむとする時歌に、

來し方は一夜ばかりの心地して

やそちあまりの夢を見しかな。(作者不詳本朝傳記)

### 一八、旅行の樂

(四、海機)

(旅行して他郷に遊び、名勝の地山水の麗しき佳境に臨め



1 たより、方便

2 非常に山水自然の景を愛好する  
癖などいふに同じ

3 封邑一萬戸を有する大諸侯

ば、良心を感じ起し、鄙吝を洗ひ濯ぐ助となる。是も亦我が徳を進め、知を廣むる<sup>1</sup>よすがなるべし。又いひ知らぬ異郷に往きて、見馴れぬ山川の有様を見て目を遊ばしめ、其の里人に逢ひて其の所の風土を問ひ、或は奥まりたる山ふところに岩根蹈みて尋ね入りなどせば、素より<sup>2</sup>山水の癖ありて青山夢に入ること頻なる人は、心を留めて歸る事を忘れぬべし。あるは山遠く眼界廣き海べたのながめは、萬戸侯の富にもまされり。又その里におひ出でたる名産の異なる品を見てその味をこゝろみるもいとめづらしく、心なくさむわざなり。すべて勝地にあそびて見ききせし事、ただ一時の耳目を悦ばしむるのみならず、いく年へぬれどその時見聞せしありさま、老の後までをりをりおもひ出でられて、あたかもそ

の時見聞せし思をなして樂しむべし。是を以て世にめでたき事を思ひ出といふもうべなるかな。(貞原益軒、樂訓)

一九、一日も徒にすぐすべからず

<sup>1</sup> 梓弓春立ちしより年のくれ行くまで、射るが如くにおもほゆれば、時日のはやく過ぎゆくはとどめあへず。むべもとしと名づけつ。又時といへるならん。されば光陰箭の如く、時節流るるが如しといへるも、<sup>2</sup> 浮けることにあらず。老に向へば尙更に年月の早く過ぐる事恰も飛ぶが如し。あとをかへり見ればいそちの齡を過ぎこしもさのみ久しからず。たとひいそちの後又いそちの齡を経て、百年に至るとも尙行先の月日いよいよ早くして程なく盡きなん事思ひやられは

1 引く、張る等の枕詞、古今集に梓弓春立ちしより年月の射るがごとくもおもほゆるかな(躬恒)

2 不確か



(三元、水産)  
3 年々歳々花相似  
歳々年々人不同  
(劉廷芝)

べる。いくほどなき残れる齡を樂しみてこそ過ぐさまほし  
けれ。憂ひ苦みて空しく過ぎなんはいとおろかなりや。<sup>3</sup>年々  
の花は相似たれども年々に人は同じからず。老ひかさなれ  
ば一とせの内にもやうやく衰へ行きて、今の昔にしかず、後  
の今にしかざる事を知りて、豫てより悔なからん事を思ひ、  
時日を惜み、一日も徒にすぐすべからず。今日暮れて明日も  
ありとて頼むべからず。今日の日の内を日々に惜むべし<sup>1</sup>

(樂訓)

二〇、この世の樂

つくづくと思へば樂多きこの世なるを道を知らざれば  
われと心を苦め<sup>1</sup>天を怨み人を尤むかく道を知らで憂おほ  
き人はくれまどふ心の闇こそむげにおろかなりといふべ

<sup>1</sup>子曰、不怨天不  
尤人、下學而上  
達、知我者其天  
乎。(論語)

<sup>2</sup>玉櫛笄、覆ふ、奥  
開く等の枕詞。

<sup>3</sup>子曰朝聞道夕死  
可矣。(論語)

けれ人の身金石にあらず生けるものつひに死なざるはな  
し又二たび生れくる身にしあらざればこの世なる間は樂  
みてこそありぬべけれくやしく過ぎし昔の事はすべきや  
うなしいくばくならぬ齡なれば今より後一日も早く日月  
を惜み先の僻事を悔いて飛彈たくみうつ墨繩にあらねど  
も只一すちに善を好み道を樂みて過さんこそこの世に生  
ける甲斐あるべけれ年老いては同じ事するならひなれば  
蚤のたぐなは繰返しかくいひいひて<sup>2</sup>たまくしげあけくれ  
みづから心を戒め又人に樂をすすむるなかだちとするな  
らしかへす<sup>3</sup>われも人もかく生れつる樂を知らで身を  
いたづらになし<sup>3</sup>しても甲斐なく世に朽ちなんことうらむ  
べしもし朝に道を聞けらば人となれるかひありて夕に死



ぬともまた何をかうらみんや。(樂訓)

二、月の前

1 文治二年、後鳥羽上皇の御宇、近衛大將の御位、鎌倉大將の御位

1 文治それのとしの秋八月十五日鎌倉の大將殿鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふれいの事として御供つかうまつる人々みさきおひ御あとへ仕うまつれる渚に遊ぶ蘆たづのあゆみして疾からず遅からず列をみださずねり出でさせ給へるを大路に膝折りふせかしこみ奉る人数ふべうもなくあまたあるにけいめいしてあなただにいはず世に厳しくたふとき御有様なりかへりまをしまして御手輿に召させ給ふほどさとき御まなじりに見とゞめさせ給ひ御階の忌垣のもとにかしこまりをる法師のあるが見上げ奉るつらつき旅に飢ゑていと瘦せ黒みづきたるに衣杖笠などもかたるものの様したるが眼を偷みてうすすまりをるなほ人ならずおぼしけむあの方師が修行するやう名をも問へ」と仰せたうぶ御輿添の若侍急ぎ走りよりて「ありがたく御目たまへり何處よりの修行ぞ名をも申せよ」と云ふゆくりなきに驚きざまして「雲水にありか

2 文王が大公望呂 尚八史略に有る 尚者東海人 尚年老漁釣至周 困西伯將獵非 曰非龍將獵非 非龍將獵非 獲霸非虎非 吾大公望之輔 載與之曰大 故號之曰大 上皇の御所 大日本隱逸傳 緣の記あり 6 5 4 3 7 物に哀あり 8 將軍家の御座 意の異稱は漢 座論功異私將 樹軍功異私將 將軍の御座 大樹の御座 御側を御蔭に 御蔭を御蔭に 伊勢の海は内海 千尋の濱は内海 浦の濱は内海 下の海は内海

定めず侍るものにて名は圓位と申す」といふ聞しめされて「さればこそ聞き知りたれ穴熊のたけき獲物のたぐひならで賢き人得たるためしに誘ひ歸らむ我が後につきて來れといへ」とて召しつれさせ給へり御館に入らせ御裝束改めさせ給へばやがて大となぶらあまた照しかかげたり「けふの道行きづとゐて」と仰せたうぶ「法師參れ」とおまし近き所の一問なる簀子に召されたり大將殿見おこせ給ひて「昔は菟姑射の山の御宮仕せし人の世を儂きものに思ししみて身は黒くやつしたれど月花の歎の譽は物の心なき吾妻人さへ聞き知りたるぞ文字の數だに歌とのみ思ひしもかう指し向ひては武士の負け心もあらずなりぬるぞ八百日ゆく濱の真砂の中には玉とて拾ひ收めたらむを語りて聞ゆべし」と仰せたうぶいみじくかしく「思ひかけず大木の御蔭に參り侍ればいとやかやしきにぞたゞ夢路たどるやうに侍りて聞え奉るべきことも侍らずさとき御眼に見あらはされ侍ることもうち出で侍れ伊勢の海ちひろの濱におり立ちならひ侍れどかひあることもうち出で侍らぬにはこれとて捧げ奉るべくもあらず君にもかねて學ばせ給ふとも漏り



拾ひ貝を拾ふ如く歌の道に下り立ちて歌よむべは習ひ侍れど清き潮間に莫馬摘まむ貝は拾ひ玉や拾はむ馬(催馬樂)の濱に拾ふも伊勢の海の千尋の濱に拾ふも今やなるてふ貝かあるべき(後撰集)此等の古撰集の文

12 上品  
1413 漢高祖の故事、漢史に出づ  
歌に曰く大風起兮雲飛揚威加海兮分歸故鄉安得猛士守四方  
15 魏武帝曹孟德赤壁戰の前日樂を横たへて歌ひしといふ故事、月

聞き奉る天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるにおぼしよらせ給ふにはかけても及ぶまじきをさへおぼし知り侍り大空に羽打ちつけて飛ぶたづの聲霜枯の淺茅がもとの蟲の音いかで取りなめて聞ゆべきあなかしこしと申すうち笑ませ給ひ弓とりし人のもとの心の猛きにはよむ歌も直くあからさまにと聞くはまことか歌は武士の荒々しき心には詠みうつすまじきものに宮人達は沙汰し給へりとや軍に出で立ちて笛鼓の音馬のいなゝきは物とも思はぬをこの三十文字餘のまなびには心のおくるゝはいかに「こはかしこき御心にもおぼし惑はせ給ふものか古の代々の帝は馬に鞍おき弓矢みとらして軍にたたせ給ひし其おはん歌をよみ見奉ればたけく直々しく調もいと高しとこそうち聞き侍れいでや歌よまむとてはますらを心をとるかしくあて<sup>12</sup>になよびかにのみ詠みうつすべくするこそこの道のいみじき煩なれ君が敏くたけき御心のまゝに打ちまねばせ給はむには今の世の人誰かは立ちあへ奉らむ三尺の劔をとりて「大風起り雲飛揚す」とうたひ樂を横へて「烏鶻南に」と詠せし君達は鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや玉造らがいみじ

明星稀鳥鵲南飛云々の詩は文選魏武帝樂は矛なりあり軍陣の間にありて詩を吟詠するに染物す宮中にて染物する所

17 吳起の故事、史記孫吳列傳に吳起者衛人也好用

きを磨りみがき染殿のやしほの色もはかなき目うつりばかりは何にかはされど谷ふかき鶯の聲信濃路出づる荒駒のあゆみいづれの道何れの業にも始より優れたらむは鬼にこそ侍らめ」と云ふ  
「人々あれ聞き給へ世は棄てのがれても頼しき人の心ならずや汝が遠つ祖の秀郷といひしは世にいみじき弓の上手となむ聞ゆる傳へたる事もあるべしかくこそと思ししみぬる事は忘れずてこそあらめ事一ことにても教へ承るべし」こはますます恐れある御とはせなり御物語のはてはつはものもの道しばしも怠らせ給はぬ御心より野山をすみかの瘦法師にだに物問はせ給ふ事の忝さよむかひ奉りては烏辭がましく家の傳なりなどとして聞え奉るべうも覺え侍らすまして有りがたき大宮仕を否みたいまつりみおやたちの慈しみをさへあだなるものに年わづかに二十五にして家を出でたる徒者の弦ひき一つだに心にとどめし事も侍らすたゞ一言の忘れ難きは「賞を重くし罪を軽くせよ」といひしと「任する者を辱しむれば危し」といひしとの有りがたさよ士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすといへども



兵將魏文帝以  
起將秦拔五城  
下者同衣食最  
分勞苦卒有病  
者起為吮之云々  
18 齊孫臏的故事、  
同じく孫吳列傳  
に委し

まことの情よりも覺え侍らす寵を減じて人をあやふきに墮し入るは將帥  
のさがしきにて國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず軍を出し給へ  
る事のあやしきまで賢くませるを餘所ながら聞き奉るには此方の御とひゆ  
るさせ給へ」とて額を板敷にすりつけて申す君ふみほこらせ給ひ口とく心さ  
とき法師なりこよひは月見る夜ぞ物がたり今ははたしてむ人々と土器とり  
はやし曉かけて遊ばむまれ人は酒飲まざるべし鹿猿の中に立ち交りて歌よ  
めといふとも詠むまじただ我が前に遊べ風冷かなるにもあかず飲みものき  
たなげに喰ひ散す人々はあたゝかにもこそこの火とり法師に參らせよ」とて  
白がねもて作りたる猫の形したるを取り傳へて「君より賜る」とて前に置きた  
りしし猿はなほ心猛し鼠をだにえとらぬ瘦法師が爲には似つかはしき御賜  
物ぞ」とて三度押し戴きぬあした御暇たまはりて立ち出づるに御館の人やど  
りに誰殿のわらはべならむくゝり袴の裾朝露に濡れそぼちていと寒げに居  
るを見て「これとらせむ火埋みて手足あたためよ」とて彼のきらきらしき物を  
與へてかへり見もせず立ちぬ童うち驚き「これ見給へ見も知らぬ法師の見も

口には情なく  
やさしげなれど  
心の奥に難き人  
して計り難き人  
ぞさなり唐書  
林甫の評に口有  
蜜腹有刃李義甫  
事瓊林李義甫放  
陰柔害物人謂之  
笑詭詔人謂之  
奸蜜腹刃世謂之  
口蜜腹刃  
20 前注に出でたる  
漢高祖劉邦沛  
豐色の人、隆準  
龍顏寛仁大度に  
途に天下を平定  
し長安に都す、  
六〇九〇七四六

知らぬ物を賜ひつるは」とて青侍に見すれば口をはたけかく貴き寶物を誰  
かは得させむ盗みやしつる」といふさらに道にさらにかかるる物やは  
あるべきあなおそろし殿に奉りて給へ」といふやがて御館にもて參りつかふ  
る君を呼び出でしかじかの事となむと申すいとあやし大将殿の法師に賜り  
しをいかで童には得させむいぶかし」とてまづ急ぎて聞え奉る君うち笑み  
給ひ「彼のえせ法師あなづらはしくをさなげなる物くれしとて腹だたしくや  
思ひけむ我門の前に捨て行きつるよ法師とても男魂なくば修行もえせぬな  
るべしされど家を出でて猶身を守り才に誇りて野山に交り歌よみてのみあ  
るは捨人の棄てらるべき淺ましきぞかし一度けがれし物その童に取らせよ」  
とてとりおろさせ給ひぬ。

西行後に此事を人に語りていふ右大將はまことにねぢけたる君なり口に  
蜜し給へど心には針のおはすぞ漢高の大度曹孟徳の智略あるに似て天下の  
人みな此君の網の中に入れられたるは我佛の冥福といふ事を生れ得させけ  
むただ悲しむべきは神の御裔の此後やうやう衰へさせ給はむ世の姿なるは



曹操、孟徳はその字也、機警にして機數あり、用兵の如しと稱せらる(一五五二二〇)  
21 心なき身にも哀は知られけり、鳴立つ澤の秋の夕暮(新古今四行)

とて涙とどめ難くして物語りきとなむ心なき身にもこれを聞き傳へては秋の夕暮ならずともうちひそみぬべし (上田秋成「籐笠册子」)

二二、浅茅が宿

こゝにはじめて妻の死にたるを覺りて大に叫びて倒れ伏すさりとていつの年いつの月日に終りしさへ知らぬあさましさよ人は知りもやせんと涙をとめて立出づれば日高くさし上りぬ(先近き家に行きて主を見るに昔見し人にあらずかへりて何處の人ぞと咎む勝四郎<sup>1</sup>のやまひていふこの隣なる家の主なりしがわたらひのため京に七とせまでありてきその夜かへりまゐりしに既に荒れすさみて人も住まひ侍らず妻なるものもまかりしと見えて墮のもうけも見えつるがいつの年にもなきにまさりて悲しく侍り知らせ給はゞ教へ給へかし主の男いふあはれにもきこえ給ふものかな我こゝに住むもいまだ一とせばかりの事なればそれよりはるかの昔に亡せ給ひしと見えて住み給ふ人のありつる世は知り侍らずすべてこの里の舊き人は兵亂の初

(四、水産)

1 うやまひて

2 悟を開いて佛の地位に到るこゝ

に逃げうせて今すまゐする人は大方ほかより移り來たる人なり只一人の翁の侍るが所に久しき人と見え給ふ折々かの家に行きて亡せ給ひし人の菩提を弔はせ給ふなりこの翁こそ月日をも知らせ給ふべしといふ勝四郎いふさてはその翁の栖み給ふ家は何方にて侍るや主いふこゝより百歩ばかり濱の方に麻多く種ゑたる畑の主にてそこに小き庵して住ませ給ふなりと教ふ。  
(上田秋成「兩月物語」)

二三、重宗訴訟を聽かれし心得の事

板倉周防守重宗京都の職に在ること凡そ三十餘年人敬ふこと神明の如く愛すること父母に似たり父子誠<sup>1</sup>に同じ名臣とぞ聞えしされば重宗は寵恩も殊に厚く從四位上へのぼり官左近衛少將に進まれけり重宗職に任じて後毎日決斷所に出づる時毎に西面の廊下にして遙に伏し拜むことあり此處に茶磨一つ据置き<sup>2</sup>明障子引立ててその内に坐し手づから茶ひきて訟を聽く人皆不審し合ひけり然るに

1 勝重、重宗

2 今日普通の障子、昔は衝立や襖なごなも一般に障子といひたしていふに區別



山城國葛野郡愛宕山朝日峯の祭  
神は火の神火之  
夜藝連男神

遙に年経て後問ふ人ありしに重宗答へて先決斷所に出づ  
る時西面の廊下にて拜することは愛宕山の神を拜するな  
り殊に愛宕山は靈驗あらたなりと聞きし程に所願ありて  
かくは拜しぬその所願は今日重宗が訴をことわらん心  
の及ぶほど私の事あらじ若しあやまりて私の事あらば忽  
ち命を召され候へ年頃ふかく頼み奉る上は少しも私心あ  
らんには世にながらへさせ給ふなと毎日祈誓するにて候  
又訴をわかつ事の明かならぬは我が心の事に觸れて動く  
が故なりと思ひなしぬよき人は自ら動かざらんやうにて  
こそあらめと重宗それまでの事は及び難く唯心の靜なる  
と動なるを試るには茶を挽きて知る心定りて靜なる時  
は手もそれに應じて磨のめぐること平かにして轆られて

(四、仙臺醫)

落つる所の茶いかにも細やかなり茶の細やかに落つる時  
に至りて我が心も動かぬご知りその後やうやく訴をわか  
つ又明障子を隔てて訟を聽くことは凡そ人の顔貌打見る  
よりにくさげなるごあはれましきごあり誠しきありかだま  
しきありその品多くしていくらと云ふ數を知らず見る所の  
誠しきと思ふ人の言ふ事は眞實かと聽かれかたましきご見  
ゆる人のする事は何事も皆偽と見ゆあはれましき人の訟は  
枉げられたる所あるよご思はれにくさげなる人の争は僻事  
ならんと覺ゆこれ等の類は目に見る所に心の移されてかれ  
詞を出さぬうちにはや我が心の中に邪ならん正しからん善  
からん直からんご思ひ定むる程に訴の詞に及びては我が  
思ふ方に聞きなすこと多し訴のなるに至りてはあはれま



<sup>4</sup>氣がつまるやうにあること

しきに憎むべきありにくさげなるに憐なるあり誠しきに詐ありこの類殊に多し人の心の測り難き貌を以て定めんこと叶ふべからず古の訴訟を聴くには色を以てすといへどもそれは重宗が及ぶべきにあらず又さらぬだに訴の庭に出でんは恐ろしかるべきにまして生殺を司れる人を見てはいぶせ<sup>4</sup>くて自ら言ふべき事をも得言はで罪にも科にもあふ人あらんと思へば所詮互に面を見られもせぬに如かじと思ひてかくは座を隔つるにてこそあれと答へられきとぞ (湯淺元禎常山紀談)

二四、清正の士腰兵糧を持たずして不興の事

(二六、陸士)  
<sup>1</sup>敵の城に乗り取ること

(加藤清正の士あるときの城乗に金の熨斗付の大小をさ

して堀をこゆるにうしろより尻を押上ぐるものあり我を押上ぐるよと思ひ乗上りて後に見れば熨斗付のさやを切廻して金を取られたり人みな油断なりと沙汰す清正が曰く城乗を心として後を顧みざるは勇士なり但し金の熨斗付を指したるは若輩の故なり戰場へさやうの美麗なるものをば用ふべからざることを知らずと覺ゆ末たのもしき若者なりといはれたり又ある時の野陣にて晝辨當をつかふにある兒小姓兵糧を帶せずその伯父焼飯を分ち與ふ清正これを見て少年の花車風流も時によれり陣中にて兵糧をもたざるは武備におこたりなり過代に馬を取上ぐべしとて乗馬を取上げ伯父若年のものに心を付けて教ふべきに武備を勵ましめざる科甥におなじとてこれも馬を取上

<sup>2</sup>罰金



げられたり (常山紀談)

二五、小品 五章

一、杜鵑を聞く記

<sup>1</sup> 庚子は天保十一年

<sup>1</sup> 庚子四月十五日の朝、杜鵑はじめて鳴くを聞く。立夏後、十日なり。去年は、立夏の日より鳴きぬ。今年は、去年より十日後れたるは、季候の遅速あればなり。われ、この鳥の聲を聞くことに、故兒、<sup>2</sup>琴嶺のことを思ひ出でて、悒悒たり。物によりて懷舊の情あること、皆しかり。景によりて情起り、情をもて景を思ふ。脆きは人の心なるかな。(瀧澤馬琴)

<sup>2</sup> 琴嶺名は興繼、宗伯と稱す。嶺はその號。費長(二四五八一—二四九五年)

二、砧を聞く詞

(四、山口商)

(近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、た

ゆむもまたしきる。雁がねの砧をさそふにやあらむ。砧の音の雁がねにかよふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そもそも、この音のかなしきか、住む里のさびしきか、打つをりの憂きゆるるか。みなあらず、聞く人のこころのさびしきなり)

(清水濱臣 泊陋舎文集)

三、袋 賛

(器は入る物をして己が方圓に従へむとし、袋は入る物に随つて己が方圓を必とせず。實なる時は肩に餘り、虚なる時はたたまれて懷に入る。虚實の自在を知る、布の一袋、<sup>1</sup>壺中の天地を笑ふべし。)

月花の袋や形は定まらず。(横井也有、鶉衣)

四、拂子 賛

<sup>1</sup> 漢書方術傳に壺  
公實藥、懸空壺  
於肆頭、日入後輒  
飛入壺中、見之、  
房於樓上、費長  
知其餅、非人、乃  
知進餅、餅、公語  
曰、隨我、入、壺  
房、一、觀、五、色、重  
閣、樓、觀、侍、者、數  
也、公、曰、侍、者、數  
問、耳、又、雲、笈、十  
籤、八、人、十、門



に施存魯人、學  
大丹之道、常懸  
一壺、如五升器  
大化、爲天地中  
有日月、夜宿其  
內、自號壺天人

(四、米澤高工)  
鐘馗大臣といふ

2 朝廷より賜ふ鐘  
衛兵、隨身舍人  
同じもの

3 鐘馗唐玄宗の夢  
に見え、臣は終  
南山の進士鐘馗  
也、といへる所  
の像を、吳道子に  
畫かしたりとい  
ふ故事による

遊ばんことをほつす。遊びて足らず、樂まんことをほつす。  
樂みて足らず、僞らんことをほつす。僞りて足らず、貪らんこ  
とをほつす。貪りて足らず、終に盜まんことをほつす。

(雲萍誌雜)

五、鐘馗畫贊

1 (大臣と稱すれども、隨身舍人を従へず、降魔の靈劍ありな  
がら鎮座せる社も見えず、顔に手足に朱をそそぎてぬき身  
をとつて振り舞はす、もし生酔かと思れば、かしは餅を引窓  
から覗く、下戸か上戸か分くべからぬ、文武兼備の進士の垂  
跡、げに千早振紙幟仰げば、いよいよ軒に高し。)

鬼すまぬわがおほ君の國なれば

鐘馗の劍のぬきがひもなし。(六樹園飯盛東なまり)

(七、長崎商)

1 若しなれば蝶々  
籠の苦や受けん  
(西山宗因)

2 所謂胡蝶の夢の  
故事にて、莊子  
物論に、莊周夢  
蝶也、俄然覺、  
胡蝶之夢、爲胡  
蝶也、然則、  
知周之夢、爲胡  
蝶、胡蝶之夢、  
爲周歟

3 古今集序に「花  
に、なく鶯水にす  
む、蛙の聲をきけ  
ば、生きささけけ  
るもの、いづれか  
歌をよまざりけ  
る」さあり

4 翁は芭蕉、その  
名高き「古池や  
蛙さびこむ水の  
音」の句を得て  
正風の眼を見開

二六、百蟲の譜

(蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限りなるべし。それ  
も啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ猶めでた  
けれ。さてこそ、莊周が夢も此の物には託しけめ。)

蜂の他の蟲を取りて我子となすは、老の行方をかからん  
とにもあらず。何を譲らんとてかくは骨折るにや。蜜をこぼ  
して世のためとするはよし。唯人目稀なる藥師堂に大きな  
る巢作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば  
人には悪まるまじを。

蛙は、古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたる  
こそ幸なれ。朧月夜の風靜まりて、遠く聞ゆるは善し。古池に  
飛んで、翁の目覺したれば、此の物のこと、更にも誇りがたし。



きたりし稱せらるる  
5 更にいふ語に  
二種あり少シモ  
こゝは少シモ

6 芭蕉の句に無常  
やがて死ぬけし  
きは見えす蟬の  
聲

7 ならぶ

8 晋車胤故事、晋  
書車胤傳にいづ  
9 「ほたる」のほは  
火の意なれば重  
言なりさて螢火  
を中世以後歌道  
にて禁じたりし  
也。

蟬は唯五月闇に聞きそめたる程がよきなり。やや日盛り  
に啼きさかる比は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初  
蛙ともいふことを聞かず。此の物ばかり初蟬といはるるこ  
そ大きな手柄なれ<sup>6</sup>やがて死ぬけしきは見えず。と、此の物  
の上は翁の一句につきたりといふべし。

螢は<sup>7</sup>たぐふべき物なく、景物の最上なるべし。水に飛びか  
ひ草にすたく。五月の闇は唯此の物の爲にやとまでぞ覺ゆ  
る。然るに<sup>8</sup>貧の學者に取られて、油火の代りにせられたるは、  
此の物の本意にあらざるべし。歌に、螢火とよませざるは殊  
の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

ひぐらしは、多きもやかましくならず。暑さは晝の梢に過ぎ  
て、夕は。草に露お。く。比ならん。つくつくぼふしといふ蟬は、筑

10 淵鑑類函に寢字  
蜀之先筆於人皇  
曰杜宇、稱帝曰  
望帝、其時有荊人  
龍至、其山下、忽  
復生、見山下、帝  
立以爲相、望帝  
自以爲相、望帝  
靈、因靈位、於龍  
自去、號開明、子  
鵲、故蜀人聞子  
鵲鳴、曰是我望  
帝也。

11 源頼光が土蜘蛛  
に懐き、されしこ  
平家物語中、紙、  
巻等に見えたり  
12 東海道に駕かき  
の徒を雲助とい  
へり

13 大戴禮に蟬朝  
生而暮死、の  
ありと見てたの  
むぞかたきかけ  
るふのいつかは  
しらぬ身さばは  
るしる(六帖)形  
トンバウに似て  
翅不透明茶褐色

紫戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此の物になり  
たりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも  
劣るべからず。

蜘蛛は巧みに網を結んでひそまつて物を害せんとす。ひ  
とへに奸賊の心ありていと憎し、古代朝敵の始として、頼光<sup>11</sup>  
をさへ劫したる、いとおそろし。さはいへ廢宅のあれたる軒  
に蟬の羽などかけすてたるは、聊か憐そふ折もあらんか。か  
れはかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひた  
る宿なし者をば<sup>12</sup>蜘蛛とはいかでいふやらん。

蠶の生涯は世の爲に終り火取蟲は誰が爲に身をこがす<sup>13</sup>  
や蟬<sup>13</sup>ははかなきためしに引かれ<sup>14</sup>蓼くふ蟲は不物好の謗  
となれり。さは俳諧する者を俳諧せぬ人のかくいふ折もあ



夏の夕立など水邊によはくし  
 14 蓼食ふ虫もすき  
 15 淳干茶の故事  
 南柯の夢の事  
 書言故事に異聞  
 集淳干茶に異聞  
 大槐安國見夢入  
 曰吾南柯郡王入  
 爲守凡二十載  
 使尋古槐下蟻  
 窟者出穴途  
 乃槐安國又一穴  
 直上南枝即南柯  
 郡也  
 16 韓非子曰千丈之  
 堤以蟻之穴潰  
 烟焚以蟻之斧  
 17 隆車之隆(文選)  
 註云前有兩足舉  
 之如執斧之象  
 18 沼津の近く原町  
 あり一部の浮島  
 名あり吉原北  
 今鈴川驛の西北  
 あり

るべし。  
 蟻は明暮に忙しく、世のいとなみに隙なき人には似たり。  
 東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都をのがれ  
 て、其の身の安きことを得ん。さりともたより悪しき方に穴  
 を営みて、千丈の堤を崩すべからず。  
 17 蟻螂の瘦せたるも斧を持ちたるほこりよりその心いか  
 つなり。人の上にもこの類はあるべし。  
 蟹の歩みに喩ふべき物こそなければ、唯、原吉原を駕に乗り  
 て富士を眺め行く人には似たり。  
 促織鈴蟲くつわ蟲は其の音の似たるを以て名に呼べる  
 か。松蟲の其の木にもよらぬに、いかで斯かる名をつけたる  
 ならん。毛おひ、むくつけき蟲にも同じ名あり。松を枯らし人

19 秋風にほころび  
 めらし藤袴つと  
 りさせてふきり  
 りす鳴く(古  
 今集、在原棟梁)  
 20 あまの刈る藻に  
 すむ虫のわれか  
 らも音をこそな  
 かも世を根み  
 じ(同藤原直子)  
 陸にあぐればそ  
 の直にわらふ故  
 いふ説あり  
 (元、米澤工)  
 (六、山口商)  
 21 枕草紙虫の章に  
 ちちよくさば  
 かなげに鳴く  
 やうくあつこ  
 なりて縁側な  
 に出で居るなり  
 所謂晋の竹林の  
 七賢(阮籍、嵇康、  
 山濤、劉伶、阮咸、  
 向秀、玉戎)を思  
 へるもの蚊を思  
 林より蚊に思落  
 ひ出したる洒落

に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後世を願  
 ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたくひなるべし。  
 きりぎりすのつづりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻に  
 棲む蟲はわれからと、唯身の上を歎くらん。蓑蟲はちちのみ  
 戀ひて、などか母を慕はざる。  
 (蚊は憎むべき限りながら流石卯月の頃、端居めづらしき  
 夕、始めてほのかに聞きたらん、又は長月の頃、力なく残りた  
 る、淋しき方もあり。蚊屋釣りたる家の様、蚊やり焚く里の煙  
 など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを  
 かの七賢の夜咄にはいかに團扇のひまなかりけん。(鶉衣)

二七、手水鉢銘



1 楊枝のいふべき  
 2 水値方器人因  
 3 善悪友(實語教)  
 4 正風の俳諧にて  
 5 不易流行の二方  
 6 滄浪之水清兮可  
 7 許由の故事

いでやこの手水鉢に若水くめるあしたより怠らず立馴れて齒研く楊の枝  
 をうつし軒端の梅のひとへに清かれと時に口すすぎ時に手洗ひてあらはば  
 心の塵もなかは去らざらむさるにこの亭に愛せる鉢は石なるか銅なるか  
 もしくは陶なるか我さらに知らねども水はもとより方圓の鉢に随ひ鉢は唯あ  
 るじの物すきによるべし見すやこの水の四時に絶えずしてしかも朝毎にも  
 との水にあらす萬理のこれに籠れるが中にも風雅の殊に水に似て世々に盡  
 きず水に似て時々新なるも汲みて知らばここに明かなるべきをされば頃  
 日人に傳へて予にこの銘を求めらる我聞く湯の盤に銘して日々に新なりと  
 はもとの汚を濯ひ去りて心も日々清かれとやましてこの物は飯くひ酒の  
 むすさびにも常に柄杓を手に觸るればしばらく俳諧のをかしみを離れてこ  
 れに時々新の三字を銘せむにかの盤の銘にもまさりて先聖もたしかにうな  
 づき給ふべし世はよし五月雨の晴れみ曇りみ滄浪の水は濁るともひとつこ  
 の水の底清からましかば纓を洗ひ耳をすすぎて長く閑居の契をもむすべと  
 ぞ

汲みかへてもとの月あり手水鉢 (編考)

二八、松平定信

(毛女高師)

1 莊子に悪欲喜怒  
 2 禮記に人生十年  
 3 易に君子豹變小  
 4 人革面あり

(白川樂翁公は幼時稟性虛弱なりしが醫藥灸治の力によりて成長したり此  
 の頃よりはや後年非凡の人となるべききざし見えて嬉戯のさまも凡て小兒  
 の如くならずいかで我が日本は更なり唐土にも我が名を知られむ程の偉業  
 をなさばやと思ひ立ちしは十歳あまりの時なり夫れ氣概は溢るゝばかりな  
 るに身體の健康これに伴はざる人は概ね性急なるものなりされば公の侍臣  
 たちも百方苦心して或は婉曲に諷し或は顔を干して直諫せし事たび重なれ  
 ば公も慚く其累徳を悟りていたく自ら抑へて遂に弱冠の頃には全く豹變す  
 るに至れり。

二九、花月草紙序

ひさしう浦わの里にすめる翁ありけりめかりしほやく

二八、松平定信

八五

1 海濱の灣曲せる  
 2 めは藻なり萬葉



集にしかの海人  
はめかりしほや  
き暇なみ柳げの  
小柳さりも見な  
くに

3 白波はよるの枕  
詞、白波の寄り  
來るにいひか  
るなり、猶盜人  
のこゝを白波こ  
いへばその心を  
もにほはせたる  
か

いとまには、えうなきもくづかいあつめて、しほやの窓のと  
にかいはさみおきたるを、世のえせもの、とりてかへりに  
けり。またのとし、行きてみれば、こりずまに、かいはさみ置き  
たり。かく<sup>3</sup>白波のよるよるごとに、かずもつみしかば、つひに  
この卷々となりぬとぞ。このもくづのはしつかたに、月と花  
とのこと、ながながしくかいたれば、それをもて、名たてしは  
かのえせもの、のせしことなりとぞ。あまのさへづりとこそ  
いはまほしけれと、里の子はいひき。 (松平定信)

三〇、花のこと

(なしときけばありといはまほしく、あしといふをばよし  
と事かへていはむこそ、いとねぢけたることなれ。さくららて

(元、醫專)  
(同東北醫專)

ふ花は、わが國のものなるを、からくににもありとて、さまざま  
まためしなどひきつくれど、櫻かいたるもろこしの畫もな  
く、かなへりとおもふからうたもなければ、なしとこそいふ  
べけれ。いでや、さくらといはでしも、ほなとだにいへば、こと  
木には、まぎれぬものを、ほのぼのとあけゆく山際、雲か雪か  
とばかり、さきみちたるも、かすみこめたるゆふまぐれ、花の  
けはひも、おぼろにみえて、ここにのみ、くれのこすけしきな  
といふは、浅かりけり。まいて、うてなの、のびやかなれば、近劣  
りするなどいふは、かのことかへて、<sup>1</sup>さえおふ心にいふこと  
なりかし。風にちりかふも、雨にぬるるも、遠山に見るも、軒ば  
にむかふも、明ぼのも、夕ぐれも、露のひるまも、<sup>2</sup>めがるるとき  
しなきを、ことにわが國ぶりの姿にて、枝もすなほに、花のか

1 ざえは才の字音  
なれご意義は學  
識さいふ程なり  
おふはこは自  
負する意なり  
2 目はなす



3 こそんくし、し  
つこい

4 せめしはしめし  
に同じくしみ込  
ませたるなり

たちもゆたけく、匂ひさへもこちたからぬも、あやしきまで  
にこそおぼゆるものなれ。さるを、いつこにもありといふは  
さらなり、曙、夕ぐれなどと、おもしろからむやうに、ことはそ  
ふるは、いまだ深く<sup>4</sup>せめし心にはあらざりけり。すべて、こと  
ばもていひ盡さむと思ふは、いとあさき心かな。(花月草紙)

三一、月のこと

1 色合ひ、香氣、  
光などのぼんや  
りを見ゆるない  
ふ  
2 休らふ、躊躇す  
る、ためらふ、

月のさしのぼるころ、明ぼのの空おほえて、横雲のたなび  
きたるに、やや<sup>1</sup>匂ひせめたれど、遠山の梢に<sup>2</sup>いざようて姿も  
みえず、からうじてさしのぼりけり。梢のうさも晴れにけり  
と思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近寄るほどあや  
にくに、月のかたより雲のうちへかき入るやうにみゆ。こは

4 袖

いかにせむとしばし打ちまもるに、雲の端つかた赤う見ゆ  
るにぞ。出で離れたらば、はや、かからむ隈はあらじと思ふに、  
いつのまにかまた白雲の月まちがほにたなびきて見ゆれ  
ば、胸うちつぶれてうちみるに、初のくもより出でたる光い  
とあたらしうみえてことにさやけし。かのまぢあたる雲に  
むかへば、又はせ入るもいとつらし。月のいりてみれば、雲も  
さすがにこちたからず。ここかしこに、それとおもかげみゆ  
るにぞ。ひたすらにうらみはてでみるたるうちに、<sup>4</sup>衣手もし  
めり行きて露も虫のねもさかりなりけり。つくづくとむか  
ひ居たれば、心の果なきやうにこそ覺えしか。(花月草紙)

三二、學問のこと



(七、小樽商)  
 (五、岡山醫)  
 1 晋書の孫康 車  
 胤の故事  
 2 まなぶに同じ  
 3 漢書董仲舒本傳  
 曰夫仁義禮智信  
 五常之道王者所  
 當修飾也  
 4 中庸曰君臣父  
 子夫婦也昆弟  
 也朋友之達也五  
 者天下之達道也  
 又孟子曰教人以  
 倫父子有親君臣  
 有義夫婦有別友  
 有長幼有序

(かの人は雪螢あつめし窓に年をつみてふみ見る道に心  
 をつくし侍るなりされば世の中の事にはいとく侍り  
 といへばさるこそまことの道<sup>2</sup>まねぶ人なりけれとほめも  
 のするものありとやもとより道まねぶものは<sup>3</sup>五つの常<sup>4</sup>  
 つの道よりして人ををさめ己ををさむる道まねぶより外  
 のことはなしされば世の事にさとく今のあたりのみかは  
 千年の先つ世のこと見ぬもろこしの昔今のさきよりさか  
 り衰ふるさざし人のこのころの上より仕ふる道のくさぐさ  
 に至るまで明かなるこそ道まねぶ人とはいふべけれ)この  
 世の事におろそかにてはいがで道まねぶ人とはいふべか  
 らんと。(花月草紙)

三三、雨のこと

(六、陸士)

(月の夜半こそ思ふ隈も無く、心の底も澄み渡りぬるもの  
 なれ、然れど、闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに風高く  
 吹きかふは、又勝りぬる様に覺ゆると云へば、雨ぞいと勝り  
 ぬるをと云ふ。如何にと問へば、いでや旱天の雨は更なり、草  
 木花咲きみのるも、皆此の恵にこそあんなれ。又其の感情の  
 深さを云はば、今日は元日なりけりと云ふに、雨そぼ降りて  
 霞み渡りたるはげに春哉とぞ思ふめる。師走の晦日、のどや  
 かに降りたるも春待顔にていとをかし。總て春は雨こそ長  
 閑なれ。軒端より霞み渡りて、いと細やかに降れるが、衣沾せ  
 ども降るとは見えず、軒の玉水も間遠に音してすみ捨てし







8 無骨

さも忘れぬとて端近う出づれば、夕月の光さしわたりて草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の物待顔に空打睨みて、<sup>8</sup>ふつつかなる音に鳴くもをかし。

9 さえは元さむき  
心持をいふ語な  
れど轉じて澄み  
たる意にも用ふ

秋來る頃の雨は、昨日に異なりて何と無う寂し。萩の上風外山の鹿の音なんと、月よりも身に泌む心地ぞする。常に聞き馴れし、笈の水の音までも、哀れ深くこそ、月の前の村雨も亦をかし。況いて稍、夜寒の頃、鳴き枯らしたる蟲の音の、雨のをやみに微かなる聲して、枕近く鳴きよるも、哀れなり。此の雨に、木も染めなむと思へば、茸なども生ひ出でなむ、栗もはや落つ可しなどと、童の寂しげに燈火に向かひつつ言ひ出づるも、げに様々なり。夜深き鐘の音の打ちしめるものから。流石に秋は聲<sup>9</sup>さえて聞ゆるにぞ、鐘撞く人の心をも哀れと

10 白菊の姿まんさ  
する時色の赤み  
を帯びて却つて  
美しく見ゆるを  
いふ、昔は菊の  
うつつへる盛りの  
なごいひて色の  
かはれるを賞し  
たり、春をうらむ  
行かざる藤の花  
らさき藤の花  
かへるたより  
染めやしつら  
なごめれば、龍  
の紫に咲きたる  
をいふなり

11 夕方降りたる雨  
一旦やめるが又  
夜中に降り出し  
るをいふ  
12 日を敷へて見れ  
ば

思ふばかり感情はいと深かりける。紅葉の染め添ふるも、白菊のうつりゆきて一さかり見するも、尾花の露重げに打萎れたるに、龍膽の恨み深く咲きたるあたりもつきづきし。朝顔の皆枯れたる中に、小やかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐるまで凋み後れたる亦、哀れなり。野分の風は、おどろくしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀れを添ふるは秋の習なる可し。時雨のさと音して、夕日に白く降り來るも、又音かへて枕問ふもをかし。月よりも闇の夜よりも、哀れ深きものには侍らずやと云へば、かう様に云ひならべては、げにもと云ふ可からむが、一年も降る心地して讀み見れば、<sup>13</sup>此の雨はをとつ日より降り出でしをと思ふ心は變はらじと心の中に思ひて聞きるしも亦可笑しかりけり。(花月草紙)



(四、海兵)  
(四、新瀉醫)  
(四、高等)

1 蓮

(三、海兵)  
人足所履不過數寸然而咫尺之途必顛蹶於崖岸拱抱之梁每沈溺於川谷者何哉為其傍無餘地故也(顏氏家訓)

三四、めづらしき好

(よつの時のうつり行くけしきこそ、またなくをかしきをさかざるをりの花をさかせんとし、ちるころにちらさじとおもふは、いとくるし。されば又こん年はさきぬべし、いかに心をくるしむとも霜しろく氷かたきをりにはちすの咲くべきことわりなし。されと咲くをまちちるををしむは道なり。ちるをもよそにして心とせぬはみちしらぬ心なるへし。

(花月草紙)

三五、餘地のこと

(道路は足底のひろさだにあらば歩むべしといふは例のことわりのみなりいかで歩むべからん梁の上を歩まば落ちぬべしこはかの顏氏の言ひたる餘地なきなり餘にことに甚だしく物にせちなれば行はれぬのみかうとまれぬ

べしこは事物に對して餘地なきなりと聞きぬ (花月草紙)

三六、治療のこと

(やんごとなき人にはかにいたづきにかかれりけりたやすからぬ様なりければ今このくすし一人に任せんもいかなりかれもくすしの道にはよのつねならねばこれと心を合せて藥調せよといへばはじめの醫師かうべを振りてさらばそのよのつねならぬ者に任せ給へかかるとみのいたづきを療治せん人に人をかたらひてはいかでいで來べきといひければげにもとてはじめのに任せてければそのいたづきも速かにおこたりぬ (花月草紙)

三七、漁村

(「あまの住家ばかりあはれなるものはなしいと便なき海邊の風もたまらぬ松蔭などにただかりそめに造りたる薬屋どものさま浪うち寄せなばやがて流れも失せぬべういとはかなげに見ゆるを繪に書きすさびたるなどはなか

(元、專檢)  
(六、山口商)  
1 風もたまらぬ枝の疎なる松の下







荒野の末に秋風  
を吹くさあり

〔四、七高〕  
3 軀

4 泥

5 一寸した丘

6 體よりのけ出で  
たる

7 極樂

武士の習ばかり悲しきはあらざりけりあなあはれ君に仕  
へてまめなる志を致さむ人必ず孝ある人なりあなあはれ  
〔亂世のあさましき忠臣孝子大かた幸なく赤きむくろさな  
がら駒の蹄にかけられ白き骨くちて道の草をこやせり〕あ  
なあはれ空しく塵ひちと共にその名埋れけむ人いくそば  
くぞやあなあはれすき残したる片岡<sup>5</sup>には草刈るうなるも  
靈ありなど憚りて木しげき藪原ふみ分けたる跡だになし  
折れ傾きたる石の卒都婆なからは土なからは苔に埋れて  
ゑりつけたりけむ文字やうもその名と共に消えはてにた  
りあなあはれ香華とる人しなれば<sup>6</sup>うかれし魂今もなほ  
涼<sup>7</sup>しき國へ行きやらでこのわたりにやさまよふらむあな  
あはれ雨そぼふる宵月暗き曉青き火もえ叫ぶ聲きこゆな

8 老いたる女

9 見せて

10 不祥

11 執着、事物にク  
ツツイテ離れぬ  
事

12 柄杓

ど<sup>8</sup>おうな翁は語るぞかし思ふにかかるわたりにはけしか  
らぬ物の所得てさるあやし<sup>9</sup>の業見えて人おどさむとする  
にこそ忠臣孝子君のため親のために棄てけむ身のさる<sup>10</sup>さ  
がなき執<sup>11</sup>をのこしてめめしう人に見ゆべしやはあなあは  
れさること言ひ騒がるもまた幸なきが上の幸なきにな  
むあなあはれと涙さしくまれて野中の清水一<sup>12</sup>ひさごをだ  
に手向けばやと塚のほとり近う立寄れば蟻とかやいふ蟲  
の羽生ひたるがばと群りかかりたる耳のほとりつき驚か  
す遠寺の鐘のいと高う聞えてあなあはれ

(井上文雄文雄翁家集)

四〇、學 諭

筑波<sup>1</sup>峯をや高しといふらむ三吉野<sup>2</sup>をや深しと云ふらむ

1 常陸國筑波郡  
2 大和國吉野郡



白頁

それ分けつくさばつくすべくそれ分け登らば登るべしあ  
 はれはてもなく限もなきは學の道にぞありける初山踏の  
 ほどには見るもの聞くものめづらしくいかでわれ世の博  
 士と仰がれむと賤がうみ麻のうむことなくいそしみ勤め  
 歌など詠み出でむにも思ひかけずめでたき言葉も出で來  
 れば勞なくして冠得たらむ如く人もめで稱へおのれも高  
 高と心傲せられて今にも世の博士と仰がるべく思ふめり  
 是はこれ初山踏の麓の里に花見つけたるほどなりかくて  
 三とせ四とせ年積り行くに初の如く進むべくもあらず讀  
 むべき書は眼の前に山なす高く積みかさなりめづらしと  
 思ひし事も常になりてはめでたくもあらず勢盡き志倦み  
 てただ苦しきことのみ多くそれのみかは或は妬まれ或は

4 どうして  
 5 どうかして是非  
 さま

6 險阻  
 (三元、大阪工)

7 しやべる

8 赤毛の駒なり、  
 調上持ちへるは聲  
 のみ、赤駒のあ  
 がきも、蹠のさ  
 には、踏の縁語  
 になく、意

9 神さぶる岩根、  
 みくまり山をみ

譏られ青葉ごもれる梢の空蟬かしましき事さへ聞え來れ  
 ば<sup>4</sup>いかでかく苦しき道には出で立ちけむい<sup>5</sup>かで取りかへ  
 さむよしもが<sup>6</sup>など思はるぞかし是はこれ高根の花見  
 むとて岩根<sup>6</sup>ごしき山路に行き悩むほとなり(かかればい  
 たく屈したるはさしも思ひあがりし志も沫雪なす消え失  
 せあるは僅に歌など詠みちらして月花にうかれ遊び空言  
 のみ<sup>7</sup>ひびらぎ居るなど皆この山路に倦みたるものにてこ  
 れなむ世にたくひ多かりけるさを今ひときざみ堪へし  
 のびて志したる高嶺の花を折らでは已まじと赤駒<sup>8</sup>のあが  
 き躓くことなくいそしみ勉むる人なむいとありがた  
 きかぎり<sup>9</sup>にありけるあはれわが學の徒このことわりうま  
 く悟りて山口の花にうかれて水分の岩が根踏みならず道



れはかなしも  
萬葉集)など  
水くばりにて  
水を分配する  
ミ岩石や山な  
の聲えて己れ  
前後又左右に  
水を分つこと

(四)女高師

1よじはいはれな  
ごいふ意更に轉  
じておもむき

2似合はしい

3跡なり、先例、  
方式

4道具

になうみそ是はこれ學の道のみかは大方の世のさまもか  
くこそあるらめ。(伊達千廣統の玉)

### 四一、茶の道

(しづかなる庵かき拂ひて庭に草木石などよしありてし  
なし松の濤音たてて思ふ友詣で來れば茶點じなどしてす  
すめわれも飲みなどせんはいと心ゆくわざにて文人歌よ  
みななどのもてあそばんにいとつきづきしうこそ覺ゆれさ  
るを一文字をも知らで何のみやびなる心もなきをのこの  
ただこれを大事とかまへて起居振舞つゆばかりもあとに<sup>3</sup>  
違へじと心にかけて儀式官のおほやけに仕ふるおももち  
せるに似たるはいとかたはら痛きわざなり又調度なども<sup>4</sup>

5簡略

6競争す  
7不快

8批難すべきこと  
9陶器

10品劣りて

昔の人は事そぎてうるはしからぬ方を好めるは故なきに  
あらねど今は黄金を積みてその價を争ふばかりなるを人  
ごとに挑み合へるはうたてくぞおぼゆる古の名高き人の<sup>6</sup>  
筆の跡上手にかける繪などはその價のいみじう高からん<sup>7</sup>  
もとがなかるべしきたなげなるすゑうつは物などの古び<sup>8</sup>  
損はれたるを世になき寶なりと思へるは何事ぞやされど  
家居の作りざま調度の形などにはこのわざ好める人のし  
るしたるにをかしき節なきにしもあらずそは古のみやび  
ざまにはあらねど世に埋れて事足らはぬわび人などのも  
てあそばんには却りてつきづきしきもありぬべし又あま<sup>10</sup>  
りに心を入れて作りなしたるには品おくれて厭はしさも  
多かり)(村田春海、錦織齋隨筆)



〔三七、仙臺醫〕  
〔四一、七高〕  
1 にはの意  
2 満足する

3 鶴鷄巢深林不過  
一枝假鼠飲河不  
過滿腹(莊子)

4 げがらはしきに  
同じ  
5 佛に奉る水

### 四二、知足庵の記

あはれ世のならばしこそはかなきもの<sup>1</sup>はあなれ<sup>2</sup>貴き賤  
しき品いと異なりといへどもおのがじし<sup>2</sup>心ゆくばかりな  
るは稀にてたゞ足らはぬ事のみぞ多かりける<sup>3</sup>花を思ふと  
ては梢の嵐を恨み月をめぐるとしては尾上の雲を厭ふため  
し誰かは免るべき<sup>3</sup>林に宿る鷓鴣はわづかなる小枝の陰を  
たのみながれに水もとむる鼠は唯腹を満たすに過ぎずと  
こそいにしへ人もいひつれかゝる理をだにわかたばかぎ  
りあるこの世にかぎりなきことを思ふべきかはこゝに中  
村ぬしなんよく世のちりの<sup>4</sup>けがしきをまぬがれて萱の軒  
松の扉に心をすましめ花を摘む夕闕<sup>5</sup>伽を汲む曉みほとけ

6 建久二年僧榮西  
宋より歸朝茶  
子に將來して山  
城榲尾の明恵上  
人に贈る上人い  
たぐ之を喜びそ  
の種を深瀬の園  
に植ふたり

7 うつせみは現身  
にて吾人の現實  
の身が住みて居  
るさいふ意て世  
の枕詞さしても  
論ず

につかふる暇あるときは氷をくだき雪を煮て榲尾<sup>6</sup>の昔を  
しのぶめる業にしも心をなんなくさめけるこれやこの世  
にもとむべきすぢをもわすれまた人をうらやむべきふし  
をも思はで己が心からことたる業にしもあればかのいに  
しへ人のいひけん理にこそかなはめいでやう<sup>7</sup>つせみの世  
のかぎりなき求めあるきはとは日をならべてあげつらふ<sup>8</sup>  
べくもあらざりけりうべなうべなこのすみかをしも足る  
ことを知るとは名づけしこと。(村田春海、琴後集)

### 四三、隨時樓記

空蟬の世の人のことわざ萬にさまざまなれど時に背き  
折に遇はでつきづきしからざらんはいみじきふしなりと

(四〇、高等)



1 すさまじきもの  
 ひるほゆる犬、  
 春のあじろ、三  
 四月の紅梅のき  
 め、八月の乳  
 あへずなれ、乳  
 めのさ(枕草子)  
 網代は網の代り  
 に布の袋にて魚  
 を取るもの也、  
 冬期魚獲多けれ  
 るも春は魚のよ  
 るこそ少く見て  
 る面白からず、  
 襲は四月一日よ  
 りは四月一日よ  
 襲の更衣に白き  
 故の更衣に白き  
 襲衣を用ふる也  
 八月にしては時  
 候後にしては時  
 まじき也、  
 一寸した、何さ  
 2 いふ程もない  
 (八、高等)

3 向つ峯

もいかで心ゆくわざなるべきされば夏の日は埋火のあた  
 たかなるを思はず冬に氷水の涼しさをば忘れつべし古の  
 人も春の網代八月の白襲をこそすさまじき事のためしに  
 は引出でたりけれかかれればはかなきすすみも折にあひた  
 るはをかしく見所なき本草も時を得たるはめづらかにな  
 ん覺ゆめるしかはあれど人草しげき衢の所せく門立ち並  
 べたらんあたりには時を過ぐし折を失ふたぐひ多くて月  
 にたよりよきは花にうとく水に由あるは山はるかにて四  
 つの時のめぐるに隨ひて心をやるべきすまひはいともい  
 とも難しや茲に前田の主の高殿こそあやしく所得ては覺  
 ゆれ後は市路につづくものから。前は世離れたるのぞみあ  
 り春はむかつをの花のかをりを居ながら袂にしめ夏は水

4 口をすぼめてヒ  
 ヨイ／＼となら  
 いこと轉じて詩  
 歌なごを吟する  
 こと

5 大徳は高德の僧  
 開中の傳未詳、  
 和漢の學に造詣  
 深く千陰、海春  
 等と交遊ありし  
 こと此が花琴後  
 集等にみゆ  
 6 心もちひ

(四、專檢)

1 數多の

2 卒爾、唐突

際清き池の蓮葉を舟ならずして手折り秋は月にうそぶき<sup>4</sup>  
 冬は雪に歌ふもすべて山水のあはれをそへざる折なんあ  
 らざりけるまして主人の言の葉もて友にまじらふこと廣  
 ければ時にふれ折をすごさず訪ひ來る人に皆みやび好ま  
 ざるはなしかくとこしへに飽く世も知らぬ高殿なればと  
 て聞中大徳の殊更に時に隨ふてふことをもて名づけられ  
 たるは深き心<sup>6</sup>しらひにありけらし。(村田春海琴後集)

四四、玉づさ二篇

一、小澤蘆庵主のもとに

(千さとをへだて侍れど、<sup>1</sup>こころのとし月、まのあたり語ら  
 ひかはし侍るここちせらるるままに、<sup>2</sup>うちつけなるものか

四四玉づさ二篇



ら。たちかへる春のほぎごと聞え侍り)

君もわれもも世をへつつ花鳥に

あくやあかずやいざこころみむ

ものみなはとか。む月六日の日。(加藤千蔭)

二、月の夜友のもとに

いざたまへ、もろともに、この月のさやけきを<sup>1</sup>所せきつば  
のうちにのみやは見はて侍らむ。なにがなりどころに<sup>2</sup>  
まからむ。それも、まらうとなどきあひて、あるじまうけする<sup>3</sup>  
程ならば、それがしのかくれがに<sup>4</sup>まからむ。それも、ありきた  
がひて、あらぬほどならば、北山の<sup>5</sup>律師の室を驚かし侍らむ。  
それも、もし里におりたらむほどならば、うしろの山にのぼ  
りて、夜もすがらめであかさむを、いざたまへ、もろともに。

3 皆物は新しきよ  
した人ばかり  
ぬるのみぞよる  
しかるべき(萬  
葉集)

1 究屈

2 業處の義にて田  
庄をいひ轉じて  
田家にある下家  
敷別荘をいふ

3 響應

4 ゆくを丁寧にい  
ふ語

5 僧の官名

6 蘇迷慮にて須彌  
山の一名

なべて世の塵をよそなる高山の

松のこずゑのつきをいざ見む

そめいろの峯までもこそ。(清水濱臣)

四五、吾が物學びのありしやう

己いときなかりし程より書を読む事をなむ萬の事よりも面白く思ひて讀  
みけるされどはかばかしく師に就きてわざと學問すともあらず何と志す  
ことも無く其の筋と定めたる方も無くてただ唐大和くさく書の有るに  
任せ得るに任せてふるきちかきをもいはす何くれと讀みける程に十七八なり  
し程より歌よままほしく思ふ心出で來て詠み始めけれどそれとても師に従  
ひて學べるにもあらず人に見することなどもせずただ獨り詠み出づるばか  
りなりき集<sup>1</sup>どもも古き近きこれかれと見てかたの如く今の世の詠み様なり  
きかくて二十餘りなりし程學問しにとて京<sup>2</sup>になむ上りけるさるは十一のと

1 歌集等

2 寶曆元年廿二才  
の折出京



3 伊勢松坂の木綿問屋なりしを元祿寶永の頃より伊勢木綿の名ありはれ江戸に支店をおけり  
4 おもむかせにてこゝは指圖

5 契沖著百人一首改觀抄百人一首  
6 己の見注によりて解し古法によりる所なく考證最  
7 古今和歌集の詳解三十卷  
8 伊勢物語を注したるもの五卷

8 眞淵著、我國の枕詞をあづめ注したるもの十卷  
(三) 音 (四) 音 (樂)

し父に後れしにおはせて江戸<sup>3</sup>に在りし家のなりはひをさへに失ひたりし程にて母なりし人のおもむけ<sup>4</sup>にてくすしの業を習ひ又その爲に世の常の儒學をもせむとてなりけり。  
さて京に在りし程に百人一首の改觀抄<sup>5</sup>を人に借て見てはじめて契沖と言ひし人のときごとを知りその世に勝れたる程をも知りてこの人の著したるもの餘材抄<sup>6</sup>勢語臆斷などを始め其の外もつぎつぎに求め出でて見ける程にすべて歌まなびの筋の善き悪しきけぢめをもやうく辨へ悟りつさるまゝに今の世の歌よみの思へる旨は大かた心になはずその歌の様もをかしからず覺えけれどそのかみ<sup>7</sup>同じ心なる友も無かりければただ世の人なみにこゝかしこの會などにも出でまじらひつつ詠みありきけりさて人の詠むふりは己が心には協はざりけれども己が立てて詠むふりは今の世のふりにも背かねば人は咎めずぞありける。  
さて後國に歸りたりし頃江戸より上りし人の近き頃出でたりとて冠辭考<sup>8</sup>といふ物を見せたるにぞ縣居の大人の御名をも始めて知りける斯くて(其の

9 様子、仔細、理由

書初めに一わたり見しには更に思ひも懸けぬ事のみにして餘り事遠く怪しき様に覺えて更に信ずる心は有らざりしかど猶有るやうあるべしと思ひて立ちかへり今一たび見ればまればにはげにさもやと覺ゆるふしつゝも出で来ければ又立ちかへり見るにいよゝげにと覺ゆる事多くなりて見る度に信ずる心の出で来つゝ遂に古ぶりの心言葉の誠にさる事をさとりぬかくて後に思ひくらふればかの契沖が萬葉のときごとはなほ未だしき事のみぞ多かりける己が歌まなびの有りしやう大方かくの如くなりきさて又道の學びはまづ始より神書といふ筋の物古き近きこれやかれやと讀みつるを二十ばかりの程よりわきて心ざし有りしかど取り立ててわざと學ぶ事は無かりしに京に上りてはわざとも學ばむと志はすすみぬるをかの契沖が歌ぶみの説になすらへて皇國の古の意を思ふに世に神道者といふ者の説く趣は皆いたく違へりと早く覺りぬれば師と頼むべき人もなかりし程に我いかで古の誠の旨を考へ出でむと思ふ志深かりしに合はせてかの冠辭考を得てかへすく讀み味ふ程にいよゝ志深くなりつつ此の大人を慕ふ心日にそへて切



10 田安宗武、家重の弟にて吉宗の第二子國學を好み和歌をよくすその風調在満眞淵に似たり、明和五年逝く年五十七

11 名札なり、人の弟子となり家來になるやうの時名刺さばこさなり

なりしに一年此の大人田安の殿の仰事をうけ給はり給ひて此の伊勢の國より大和山城などこゝかしこと尋ね巡られし事のありしをり此の松坂の里にも二日三日とどまり給へりしをさる事つゆ知らで後に聞きていみじく口惜しかりしを歸るさまにも又一夜宿り給へるをうかがひ待ちていといと嬉しく急ぎ宿りに詣でて始めて見え奉りきさて遂に名簿を奉りて教をうくる事にはなりたりきかし。(本居宣長玉勝間)

四六、わがをしへ子にいましめおくやう

(吾にしたがひて物まなばむともがらもわが後に又よきかむがへのいできたらむには必ずわが説にななづみそわが悪しきゆるをいひてよき考をひろめよ總ておのが人ををしふるは道を明かにせむとなればかにもかくにも道をあきらかにせむぞ吾を用ふるにはありける道を思はでい

四〇、神戸高商

たづらにわれをたふとまむはわが心にあらざるぞかし。(玉勝間)

四七、ひとむきに偏ることの論ひ

(世の物しり人のひとのときごとのおしきをとがめず<sup>2</sup>一むきにかたよらずこれをもかれをもすてぬさまにあげつ<sup>2</sup>らひをなすは多くはおのが思ひとりたる趣をまげて世の人の心にあまねく<sup>4</sup>かなへむとするものにてまことにあらず心きたなし<sup>4</sup>たとひ世の人はいかにそしるともわが思ふすちをまげてしたがふべきことにはあらず人のほめそしりにはかかはるまじきわざぞ大かた一むきにかたよりて<sup>5</sup>あだしときごとをばわろしととがむるをば心せばくよからぬこととしひとむきにはかたよらずあだしときごとを

(四、東高師) 二、新潟醫 四、東高師

1 他人の説  
2 一方  
3 動詞はあげつらふ、議論すること

4 かなはせる、合はせる、誰れの説にも反對せぬやうにするなり

5 他の



6 おおなしくて

もわろしとはいはぬを心ひろく<sup>6</sup>おいらかにてよしとする  
 はなべての人の心なめれどかならずそれさしもよき事に  
 もあらずよるところ定まりてそれを深く信ずる心ならばか  
 ならずひとむきにこそよるべけれそれにたがへるすちを  
 ばとるべきにあらずよしとしてよる所に異なるはみなあ  
 しきなりこれよければかれはかならずあしきことわりぞ  
 かし然るをこれもよし又かれもあしからずといふはよる  
 ところさだまらず信ずべきところを深く信ぜざるものな  
 りよるところさだまりてそれを信ずる心の深ければそれに  
 ことなるすちのあしきことをばおのづからとがめざるこ  
 とあたはずこれ信ずるところを信ずるまめごころなり人  
 はいかにおもふらむわれは一むきにかたよりてあだし説

をばわろしととがむるもかならずわろしとは思はずなむ。  
 (玉勝間)

四八、あらたなる説を出す事

(三、東京師)

(近き世學問の道ひらけて大方萬のとりまかなひさしく  
 かしこくなりぬるからとりどりにあらたなる説を出す人  
 おほくその説よろしかれば世にもてはやさるるによりて  
 なべての學者いまだよくもとのほぬほどよりわれおと  
 らじと世にことなるめづらしき説を出して人の耳をおど  
 ろかすこと今の世のならひなりその中にはずるぶんによ  
 ろしきこともまれには出でくめれど大かたいまだしき學  
 者の心はやりていひ出づることはただ人にまさらんかた  
 んの心にてかろがろしくまへしりへをもよくも考へ合さ

四八あらたなる説を出す事

一一七



(六、神戸高)

<sup>1</sup>何の遠慮するこ  
ともなく天下  
晴れて

ず思ひよれるままにうち出づる故に多くはなかなかなる  
いみじきひかごとのみなり(すべて新なる説を出すはいと  
大事なりいくたびもかへさひおもひてよくたしかなるよ  
りどころをとらへいつくまでも行きとほりてたがふ所な  
くうごくまじきに<sup>1</sup>あらずばたやすくは出すまじきわざな  
り)その時にはうけ<sup>1</sup>ばりてよしと思ふもほどへて後にいま  
一たびよく思へばなほわろかりけりと我ながらだに思ひ  
ならるる事の多きぞかし (玉勝間)

四九

あらたにいひ出でたる説はとみに  
人のうけひかぬ事

(六、東高師)

(大かた世のつねにことなる新しき説をおこすときには

<sup>1</sup>残念で

よきあしきをいはずまづ一わたりは世の中の學者に憎ま  
れせしらるるものなりあるはおのがもとよりより來つる  
説といたく異なるを聞きてはよきあしきを味ひ考ふるま  
でもなく始よりひたぶるにすててとりあげざる者もあり  
あるは心のうちにはげにと思ふふしもおほくある物から  
さ<sup>1</sup>すがに<sup>1</sup>近き人のことにしたがはむことの<sup>1</sup>ねた<sup>1</sup>く<sup>1</sup>て<sup>1</sup>よし  
ともあしともいはでただうけぬかほして過すたくひもあ  
りあるはねたむ心のすすめるは心にはよしと思ひながら  
その中の疵を<sup>1</sup>あ<sup>1</sup>な<sup>1</sup>が<sup>1</sup>ち<sup>1</sup>に<sup>1</sup>求<sup>1</sup>め<sup>1</sup>出<sup>1</sup>で<sup>1</sup>て<sup>1</sup>す<sup>1</sup>べ<sup>1</sup>て<sup>1</sup>を<sup>1</sup>い<sup>1</sup>ひ<sup>1</sup>け<sup>1</sup>た<sup>1</sup>む  
とかまふる者もあり)大かたふるき説をば十が中七つ八つ  
はあしきをもあしき所をばおほひかくしてわづかに二つ  
三つのとるべき所のあるをとりたてて力のかぎりたすけ

四九あらたにいひ出でたる説はとみに人のうけひかぬ事



用ひむとし新しきは十に八つ九つよくても一つ二つのわろきことをいひ立てて八つ九つのよきことをもおしけちてちからのかぎりは我も用ひず人にももちひさせじとするこは大かたの學者のならひなりされども又まれまれには新なる説のよきを聞きてはふるきがあしきことをさとりてすみやかに改めしたがふたぐひもなきにはあらずふるきをいかにぞや思ひてかくはあらじかとまでは思ひ寄れどもみづから定むる力なくて疑はしながらさてあるなどはあらたなるよき説を聞きてはかくてこそはといみじくよろこびつつたちまちにしたがふたぐひもありかし大かた新なる説はいかによくてもすみやかに用ふる人まれなるものなれとよきは年を経てもおのづからつひには

世の人のしたがふものにてあまねく用ひらるればその時にいたりてははじめにねたみそしりしともがらも心には悔しく思へどおくれればせにしたがはむも猶ねたく人わろくおぼえてこころよからずながらふるきをまもりてやむともがらも多かりしか世の中の論さだまりて皆人のしたがつふ世になりては始よりすみやかに改めしたがひつる人はかしくこく心さしくおもはれふるきにかかづらひてとかくとごこほれる人は心おそくいふかひなく思はるるわざぞかし (玉勝間)

五〇、古よりも後世の勝れる事

古よりも後の世のまされることよろづの物にも事にも



1 押し倒す

(四、高等)  
(四、神戸高商)  
(五、岡山醫專)  
(五、桐生染織)

おほしその一つをいはむにいにしへは橘をならびなき物にしてめでつるを近き世にはみかんといふ物ありてこのみかんにくらぶれば橘は數にもあらずけ<sup>1</sup>おされたりその外かうじゆくねんぼだいたいなどのたくひ多き中にみかんど味ことにすぐれて中にも橘によく似てこよなくまされる物なりこの一つにておしはかるべし或は古にはなくて今はある物もおほく古はわろくて今のはよきたぐひ多しこれをもておもへば今より後も又いかにあらむ今にまされる物多く出で來べし(今の心にて思へば古はよろづに事たらずあかぬ事おほかりけむされどその世にはさはおぼえずやありけむ今より後また物の多くよきが出でこむ世には今をもしか思ふべけれど今の人事たらずとはおぼ

えぬが如し (玉勝間)

五一、書うつし物かく事

ふみをうつすに同じくだりのうちあるはならべるくだりなどに同じ詞のある時は見まがへてそのあひだなる詞どもを寫しもらすこと常によくあるわざなり又一ひらと思ひて二ひら重ねてかへしてはそのあひだ一ひら<sup>1</sup>をみながらおとすこともありこれら常に心すべきわざなり又よく似て見まがへやすき文字などはことにまがふまじくたしかに書くべきなりこれは寫しがきのみにもあらず大物かくに心得べきことぞすべて物をかくは事のこころをしめさんとてなれば<sup>2</sup>おふなくもじさだかにこそかかま

1 みながらに同じ

2 随分



3 甲斐なき  
(二、高)

4 くりかへし

5 なめきは非禮不  
儀等の意、讀め  
ぬさばいふもの  
のさればいふの  
て問ひかへすの  
はあまり無禮の  
様なのでの意

(四、東京師)  
(四、東北農)  
1 見おさりがして  
ゆかしさがなく

ほしけれざるをひたすら筆のいきほひを見せんとのみし  
たるはいかなることとも讀みときがたきが世におほかる  
あぢきなきわざなり(常に書きかはす消息文なども文字讀  
みがたくては言ひやるすぢ行きとほらず讀む人はた苦し  
みてかしらかたぶけつつかへさひ讀めどもつひに讀みえ  
ずなどしてはここ讀みがたしとかへし問はんもさすがに  
なめきやうなればただおしはかりに心得ては事たがひも  
するぞかし) (玉勝間)

五二、手かく事

(よろづよりも手はよくかかまほしきわざなり歌よみ學  
問などする人はことに手あしくては心<sup>1</sup>おとりのせらるる

なるものなるに  
の意

2 満足出來す

3 面目なく

4 不完全に見にく

5 拙き

をそれ何かはくるしからむといふも一わたりことわりは  
さることながらなほ<sup>2</sup>あかずうちあはぬ心地ぞするや(宣長  
いとつたなくてつねに筆とるたびにいとくちをしういふ  
かひなく覺ゆるを人の云ふままに<sup>3</sup>おもなく短冊一ひらな  
どかき出でて見るにも我ながらにいと<sup>4</sup>かたはに見ぐるし  
う<sup>5</sup>かたくななるを人いかに見るらむとはづかしくむねい  
たくて若かりしほどになどて手ならひはせざりけむとい  
みじうくやしくなむ (玉勝間)

五三、ふみよむ事のたとへ

(須賀直見がいひしは廣く大きな書をよむは長き旅路  
をゆくがごとしおもしろからぬ所もおほかるを經行きて

(元、高)  
1 伊勢の松坂の人  
宣長の高弟にて  
和歌をよくせり  
師に先立ちて逝



は又おもしろくめさむるここちする浦山にもいたるなり  
又あしつよき人ははやくよわきはゆくことおそきもよく  
似たりとぞいひけるをかしたとへなりかし (玉勝間)

五四、述 懷

昨日<sup>1</sup>は今日のむかしにてはかなくのみ過ぎに過ぎ行く  
世の中をつくづくと思へばあはれわが世もいくほぞや  
手ををりてかぞふればはやみそちにもあまりにけり命長  
くて七十八いけらむにてだに早くなかは過ぎぬるよ  
と思へばまたよごもれるやうなる身もゆくさきはどなき  
ここちのして心ぼそくぞおぼゆる(かくのみはかなくここ  
ろなき草木鳥けだもののおなじつらになにすとしもなく

1 あすもあらば今日  
もかくや思ひいでん昨日の  
暮を昔なりける  
(新勅撰和歌集  
源光行)

2 春秋に富むこと  
よはゆるの義また  
延び行く齡のこ  
もり居る意

(四、高等)  
(四、四高)  
(三、専檢)

3 物に熟達するこ  
と少く、出来る  
ことが少く

4 數へられ  
5 身を益なきつま  
らぬ者に放らか  
しうちすてらべ  
きに非ずす也、  
即自暴自棄すべ  
きはふる(放浪零  
落)を能動に用  
ひたるにてはふ  
らすの意  
6 見られる程に、  
相當に  
7 げがみなり、  
ごうかかうか  
8 あへなき頼み、  
頼み甲斐なき頼

あかし暮しつついけるかぎりの世をつくしていたづらに  
苔の下に朽ちはてなむはいとくちをしくいふかひなかる  
べきことと思ふにもよろづに<sup>3</sup>いたりすくなくつたなき身  
にしあれば何事をしいててかは世の人にもかずまへられ<sup>4</sup>  
なからむ後の世にくちせぬ名をだにとどめましといとど  
人に似ぬおろかさへとりそへてぞかなしくころうか  
りける(さり)とはた身<sup>5</sup>をえうなきものにはふらかしはつ  
べきにしもあらずかくのみつたなくおろかなるころな  
がら何わざにまれおこたりなくわざと心にいれてつとめ  
たらむにつひにはひとつゆゑ<sup>6</sup>づけてな<sup>7</sup>のめにしいづるふ  
しもなどかはなからむとあい<sup>8</sup>なだのみにかかりてなむ  
(本居宣長鈴屋集)

近世隨筆抄終



大正九年十月二十五日印刷  
大正九年十月二十九日發行  
大正十年三月十日訂正再版印刷  
大正十年三月十八日訂正再版發行

近世隨筆文抄

定價 金參拾錢  
大正十一年度臨時定價  
金五拾七錢

著者

下村 茨

發行者

東京市神田區表神保町二番地  
鈴木 常次郎

發行者

大阪府東區博勞町五丁目五十六番地  
鈴木 常松

印刷者

大阪府西區阿波座二番町一番地  
日本印刷製本株式會社



發行所

東京市神田區表神保町二番地  
振替口座東京二六四四番  
大阪府東區博勞町五丁目  
振替口座大阪四七一番

東京修文館  
大阪修文館



